

あふれて通ひたえにたりといへばいたづらにながめくら
さんよりはとて國満の家などにてふること物語など講す
或日雨中蟲といふ事をもちよみける

あめの夜のなかきうらみをつねよりもまめやかになく
むしの聲かな」人々のはことしげ、ればもらしつおもひ
のほかにとまりて九月四日にもなりぬ此日はさきの妻
のうせにし日なればはやく住ける家にてあと、ひなどし
て墓にもまうでたるにいつしか十七年にこそなりにたり
けれあはれなる事そのをりばかりおぼえてまはたれをる
に鷹の鳴ければ

ふりにけるとこそ世をまたふかりのみはめぐり来てこそ
鳴わたりけれ」わが氏の神は岡部の賀茂なりある時東麻
呂うしみやこにかへるに濱松によしありてまばらくいこ
へるまゝに詣てよみける歌

みづ垣やその神山の影うつす岡部の松もいく世へぬら
ん」とぞありし今おのれほどもなく立かへりなんとする
にまうで、奉りける長歌

そのかみの事をしとへばかけまくもあやにかしこし遠
つ神遠つあふみにはかりなき恵もふちの郡なる岡部の
里に山代の賀茂の宮居の新宮の其瑞籬の影うつしいは

ろびとの數ならねどもまれに來てわれもことあげす岡
のへの神代のこと松ぞまらむ

かぎりあればあすは立なんとするに妻子のまどひ來すく
れくとなごりをしむに身なから心にまかせねば人やり
ならぬわかれ路こそわりなくかなしけれつまる物の手
ならひのやうに書つけたるをとりて見れば

あふからにわかれむこともわすられてうれしかりしぞ
今はくやしき」とおもふ心をつぶくとつづけたるもな
か／＼にてわれもたゞことに

あふからにわかる、うさはありながらまたもこととは
えこそおもはね」濱松の名をたのめばこりすまの海なら
でと書さしぬ此外にもありつれどたちのいそぎにもらし
つ十一日曉にたちいづこん年また歸らむことをいひて

こむとしとことにはやすくちきれともおもへはとほき
月日なりけり」海山をだにいくへともなくこえさからん
かなしさ老人のかなしみ給ふにそへてつまこはらからの
名残とりあつめたるわか心のうちいはんかたなきにむね

つとふたがりて送りに去たひ來たる人々に物もえいはす
朝はらけのそがひの梢なつかしくさかさまにもものらまく
てかへり見がちに行に思ひの霧はふたがれど空いと晴て

ひこし世は皇の神のみことのおほみやのつほねのかず
につかへつるそのまるとしにはらからの人につたへて
すへ神のみけにそなふるいほまちはしる水のたえ
やらすまかせ給ひし文永フナナガ永年の名におふ御あるしをう
けつぐま、に久かたの乾の元ノトのとしにさへまるとしたま
へるみことのりうけかさね來て君が世を千世萬世とい
のらへはわきへの氏もおのづから世々につかへてみま
るしのありとはいへど夕附日さすがに時世うつろへば
かひもなきさの波風のまくめるまゝに赤駒のはらばふ
田居の畦ツラをはなちみぞさへわかすいほまちはの名のみ残
りてはたまちもあらずなりぬることをしも思ひなげ、
どせんすべのたづきもまらずひつちほのたのみもあら
ずまかれどもうがらやがらの多ければ神にもつかへも
の、ふの道をもふみておのがま、時にあふひを松がえ
の猶世をへつ、梓弓引馬のさとにたてなめて軍の君の
はた雲のおこり給ひし引馬野にくさむすかばね露霜の
けなばけぬべくおひそやの雪とみだれてあらましきあ
らしの風をふせぎつるかひしありとて物かづけいたゞ
きまつる此神のみいきほひあるまるとして神のみとし
路またさらにあがちたまひて氏人はいまもつたへつも

風もまづかなれば天の川におりたちていと、くさしわた
すもあやにくなりやけふは懸川の宿の鈴木のながしが
もとにゆかり有てやどりぬ政名などいふ人もまちうけに
たりとてとく來て物がたりするに夜いたく更にければふ
しぬたれもみなうたよみつれどあだしことにまぎれてか
へしせずさやの中山の朝露分るほど風たちていとわびし
深山もさやにとひとりこたれて猶横をれるさまのおもふ
方のため今の間にうかるべしと思へば足もいそがれず菊
川の里にいたりぬ

咲にけりいま越くれば菊川のさとうちかせる山の下か
せ」名におひて菊いとおほかり大井の社行手にをがみて
藤枝の宿にやどる青島の何がしくすしなどまで來て物語
などまばらくして歸ぬ曉ふかく出て岡邊わたりをゆくに
山もとの木ぐれに所々ほかけの見ゆるを夜ふかく出きた
る里人にとへば鹿火なりといふ山田のくろにおくかひ是
なりけり山賤のおもひめぐらささいひなれたる詞こそま
ことなりけれ猶谷かげ行手の田面にうすく霧わたれるが
中にむら／＼立のぼる烟に朝霞かびやか下おもひまられ
ていと興あるあけぼのなりうつの山のむかしの道はと山
畑にそばかるをのこにはするにいらすとみなさけな

げにいらふにくむ人もあれどまらざるぞまことならんか
し世の中にあらんとする人はおもてをよくしことばをた
くみにするにそのまゝに心うる事のたがはざるぞすくな
きなどいへば葛天氏の民も山の中にはあるぞかしとわら
ふ

世の人の心や賤が山ばたのそばくしきぞまことなる
らん」ねむたかりつるめもさめぬるに見ればつたかへ手
のもみちいとことなり和泉式部がことばもおもはれてを
かし

あをかりしうつの山路は夢ならしきむるうつ、にもみ
ぢをぞ見る」今宵は十三夜なるに清見が關にこそやどら
めとおもへと日高し契るはかりの日數もはべるはなど人
人のいふにわりなくて過ぬ歌もよみつれど中くにても
らしぬくら澤などいふ坂をくだるほど伊豆の山にやあら
ん海よりあなたの峰に月はいでたり海の面は夕日の色の
まだかすかに、ほへる波の上に月の光のほのくとかさ
なりたる紅のきぬに海賦のうすもの、裳のひかれたらん
とみゆ島のかげなどはすそごにもかよひてよにたとしへ
なき心ちするが見るくくればつるもをかしきをふじの
ねはひとり猶夕日のいろ雪にはえて中空にか、やきたる

らきに霧立こめたる袖のまゆりもたゞならず
古郷のそらさへ見えぬ箱根山こゆる驛のすゝろにぞう
き」山くのもみぢはいろくゆはたをたちまじへた
らんが如く世にはそむべくもあらぬ梢ども草の葉さへま
ぐれあへりいかで旅ならで見はやとぞおもふ下りてより
は何のふしもなし藤澤の他阿上人ははやくむつましきわ
たりなれば立よらまくおもへどあすははやく入べきにて
過ぬとつかの宿にやどれりおもひつゞける事もつかれ
にければ筆ならで枕をぞとる十七日のひるつかた品川渡
りにいたるはるくとのぞめば舟よりかちよりつとふ物
の多かるにかしき御いきほひのあふがれて旅のつかれ
もおほえず

大君のとほのみやこの八十のつにところせきまでうく
たからかも」ふるびにたる哉家持が集にやいれましとて
人くわらふ

後の岡部日記

九月十日にはかにおもひたちて遠江にまかる此道大かた
にむゆかなんふべきをいかにぞや雲風もけしきだちてた
だならねば川ども水のこゝろをおそりてにはかに五日に
てをとおもひなりてげり戸塚と藤澤とのうまやのあはひ

はよそはくれはてにけるめうつしにおどろかる

山くはくれぬる雲のそらに猶夕日のをこすふじのま
ら雪」くれはて、山井の宿にやどる今夜ばかりはまたも
あらじ夜ふかく月に濱づたひせんとて立いつ月は海ごし
の山のはちかくなりて波の上は鏡の如く平らかにあきら
かなれば三保が崎伊豆の山く残りなく見わたさる入江
のむらの八聲の鳥も耳なれぬこ、ちせらる

まとろなる里のわらやの數みえて明ゆく月に鳥ねぞ
する」明ゆくま、にけふは富士のねに雲のちりもるすゆ
くく見むとて馬にてぞ過る

いつの世のちりひちよりかなりいで、富士ははちすの
花とみゆらん」いにしへになぞらふる長歌よまんとて馬
の上に、よひつれどねむたさにさだかにもつゞけられね
ば又こそとおもひてなればにてやみぬみしまにやどりぬ
夜をこめて箱根路のぼる

たれかふる古郷さふる山くを月にながむる夜のあは
れは」分入ま、に身に入かへる深山の秋風鹿の音ながら
うち吹めるを聲きく時そとはか、るをりこそと覺ゆ此山
をしも越えは古郷は空さへ見えじとおもふに更に名残お
ぼゆる明かたなりたうげのすくをすぎゆけば杉村のをく

行ほどまびてふ魚を馬に二つ三つなどおほせつ、いくら
ともなくこなたさまにくさるにてもいくそばくぞと問ふ
に七十まりの馬の數なりといへりこれは大磯小いそなど
にてつりにけるになん古事記などの歌にはおほをよしま
びつくあまとも萬葉集にはまびつるともあるよいかにぞ
とてそのものに問ふにおよそ七月の頃よりとしくつ
るめり舟どもおのが浦くこぎいで、かれがあるあたり
によせつ、ふとさは馬の荷ゆふらんばかりの草綱の長さ
はいく千ひろともなきがそのさきにかれがこめゆる小魚
を釣にさしてうちいるればくひてそこはかとなく沖にも
てゆくを行まにくゆるしやればつひにはかならずまた
こなたさまにかへり来るをまたかへり来るまにく引た
ぎつ、ほどく舟ちかくよせたる時うちかぎとて木の先
によこさまに釘をいせしたる物をてごにもちてかれが
かしらにうちつけてうめきて舟にをこづり入るなりはじ
めに沖さまにゆく時さかひて引ばいかにあるつなもふと
くひきるめるによりてゆくまにくやるなめればいと長
き綱なりけりまたもりといふほこして舟よりつくありと
ぞめづらしくもあるかなむかしのふみはまことなりけり
といよく思ひしらす又のうらぎにべなどいふ魚はとり

4

大なる物にてのうらぎはまびのごとくにてうろこありにべは石もちといふ魚のおほきになりたるなりともいへりかしらのうちに石ありといふなりさて此魚のかしらの腹を煮たるもて丹は作るなりけりかれ市にもて來ればうたへまうして皆めさるめりかしらはとゞめられ身をば給ふとなむ十三日駿河の國府にいたりぬ萬葉集に「焼津べにわが行しかばするがなるあべの市路にあへるこらはもと讀たるはこ、の事なりけり此國府はすなはちむかしのおべの市なるべしこ、の海べに焼津といふ所今もあなりこふをすぎて阿部川のこなたをさわたりといふ今年五月のころあべ川の上つ瀬に水はふれ堤きれて行かひもたえにきとむさしまで音はやく聞えし所なり今はその水口のうへによこさまに石こめたる籠を多くさしいだしてければ水はむかふさまによりてながるればこなたへはかつかつ落なりそれがみさかりに瀧もげに落けんあとも見えでは八町ばかり長さは六十町ほどにてやがて海にいたれりと云りいくそはくの里の草木はみくづとなり人は魚とこそなりけめそのをりのことを聞に或は家ながら流行に老たるもわかきもたすけ給へとこゑをかぎりよべどくかに見る人いかでくと手かく物からすべなくあるは命

をばからくのかれしもなり所も家もあらず老たるは子をうしなひわかきはおやにはなれてかなしみあへりとぞ今もさるたぐひの人のかたゑとなりてそこら道にふしてなげくなど路行人の心ぐるしと思はぬはなしすてちかき年比いづごにても水のわづらひぞおほかめるこれをおもふにかくのみ御世の治りにたればおのづから人くさも多くまたはよく意得ぬ人はにひばりの田のいで來ればほどにつけつ、物ゆたかになりぬとのみおもふ故にこ、にかしこにおほくのひばりをのみなすめりおよそ草木のある野山には大かたの雨ふりたるにはつちにしみ入てながる、水はすくなくきをかの山もやぶもにひばりになれ、ば溝をかまへて水をひとつにながすめればつちにまぬのみかはにござさへうちそひていきほひますくつよくおしくだして末にながれあつまりてはいかなる堤もたふべくもあらずさてはか、る事こそいでくめれ田どころといふ物ともよりある所をよくやしなひたて、こそよろしき物をともすれば租税の多かるとてにひばりにのみ民の心をうつしてよきやしなひくさをもちしこにはこび物すればかれはまばらくよろしきにたれどもとの田ところいよくすくなりておのがなりはひのたのみだに自

然にすくなくなりもてゆくぞかしやむごとなきあたりになろしめさする事にはあらぬをしもによこさまに申ことなどやあるらんげかしき事にこそけふ末の時ばかりより村雨さ、とふりてうつの山雲むしてくらう道もみえぬはむかしおほゆれどつたのもみぢもまだしきにあふ人もけふはなしうつ、のやみにてこえぬ藤えだのうまやにいたれ、ば日くれて雨はいよくうつがごとし大井川はいかにぞと、はするにさのみたはやすくは水ので侍らねばさやはいそぎ給ふべきなどいへどさきくもためしあればうまやにいそぎてうまをたら調せさせて雨にきほひていでぬ島田のうまやまでいたりしは亥二つばかりなりけり大かた人もねたるをまひてもよほしてわたりぬこよひは十三夜なればあづまの友だちは猶月めですらんを此くるしきに歌もなしかなやにやどりして妹ならねどぬれたる物あぶりほすこ、ろおちみつればすこしをかしさもいできぬさるあひだに風さへ大に吹いでぬまことによくこそわたりつれとて従者もよろこびあへり明日なん古郷にいたるべきをかなたにて此川の渡瀬いでこんをまたばたなばたよりけに心いられこそせめとうれしき事またなしこの道はすべてまかなりすこしもいそぐほどの事な

らばいよ、いそぎて川をばわたりぬべき事にこそあれ十四日空晴て懸川まで來るにはら川といふ河の橋おちたりとてまゐる人あるかたに入てやどりて十五日につきぬ人々うれしと思ひていかでけふしもおはしけん川はいかに侍りけんと思ひてわたりたる事をば思ひかけすいぶかるなりけりさて岡部の家にゆきてかぞいろのゑるしをがむにことしむ月廿三日になん母はうせ給ひにければまだおはさぬものともおほえぬをそなへもの、具どもまろくてあるを見るもいはんすべなく泪のみす、みてよ、とながる去年の冬まゐりござりしおこたりをくいのやちたびおもふもかひなし御はかにまうで、
野への露消せぬほどにとはざりしわが身のつみぞおき所なき」とまうすをたゞ松の秋風のこたふるこゑをのみき、てさりぬさるはことし二月の三日になんとみの事とて文の來れるをおどろきて見ればはやく正月廿三日の朝くちつねならずとてすこしふし給ひしにやをらおきて手水めし人々をよびて一人をうしろにおきてか、へしめ佛のかたにむきてあみだほとけをとなへ給ふこゑ二こゑ三こゑのうちねむりたまへばすなはちたえ給ひぬるをかたへの人々もねむり給ふにやとおもふやうにて何のくる

しきもみえ給はずそらの人をさてもめづらかにこそ終
 たり給ひにけれとしころ神佛をたふとみすべて人をもお
 ふなくいたづきまづしき物をばあはれみものこふかた
 るなどの來れる聲を聞てはみづから物まゐるをくひさし
 てあたへしめなどし給ふめるむくいになんといひあへり
 とぞ去年の冬いたるべきをやむごとなき事ありて正月に
 といひかはしをるほどに此三月なん東に御八講行はせ給
 ふに東にはまねなればさるべきつかさくにも其事ま
 給はぬにくはしく聞えよなどあればふるき書ともとうで
 てそれに筆くはへなどしてやむごとなき御方くへまる
 らするによるひるいとなくてむ月はすぎぬさるをか、る
 事を聞てくやしなどいふもかぎりなしも、をつかみあし
 すりしてなくもあやなきわざかなかくては何事をかはせ
 むとてうちこもりをるを枝直通泰など來りてよし今はか
 ひなし母君もとより佛の御事をこそたふとみ給ひつれ御
 八講の事まうすはおのつからなる宿世なるべし此事きは
 めておろそかにまたまふまじきなり喪くのうちのにおこなひ
 になふべしとす、むればかた手はなみだながら猶筆と
 りて書はて、奉りぬその後はいそぎのほりてもなにか
 ひかあらんとてこもりをるにこの九月におもひ立ぬるな

り廿六日は五社の遷宮あり神主民部少輔はもとよりの
 ちぎりふか、ればまゐるべきを此身にしあればうちこも
 りをりぬされど祝詞の案はせよかしとあるにけにもかり
 の御うつろひの時もまゐりあひて書つればとてこたびに
 は似つかねどかきぬ少輔はもとより此道の人ながら此を
 りしもいとく事まげ、ればもとむるなりけり」十月十
 日阿波守國滿が家に人を集りて歌よむ此たびはたはむれ
 歌はいはじとおもひつれば心ならねど川水鳥といふ題を
 あはれまた今年も冬の山河にいつしか來つ、うかぶ水
 鳥かくておほえず日かず經ぬれば東よりもよほしの文
 なきりなれば廿日あまりに立なんとす例の妻子など名殘
 をしむ後の親といふもいと老たればむねのみふたがりて
 日をおくる母の御墓にまかりまうしにまうで、こゝろの
 うちに
 なくくもわかれしときをわかれてわかる、おやの
 なきぞかなしきとおもひつゞけらるいとしもかなしく
 え立さるべからねばや、久しくうづくまりをるを日くれ
 ぬと従者のいふにかへり見がちにてさりぬ此みはかは岡
 部村の濕海寺といふ寺の山になんあるこの所今は伊場と
 ぞいふなるむかし文永乾元などの繪旨にもその、ち東よ

りの御志るしなどにも遠江國敷智郡岡部郷とぞありける

賀茂翁家集卷之五終

賀茂翁家集拾遺のおほよそ

此翁の歌かきあつめたるがありしはつたはらずなりぬるよしはさきに村田春海くはしくいへり今こゝに拾遺とて書あつめたるは翁にもまなべりし諸成文伯などいへるひとくのはづかに去るしおけること又おのれが去れりける人の家にちりほひのこれることをもとめ得たるなりさるは寫しひがめたるもおほかるべく又さきに心ありてのぞきつる歌もありぬべけれどいまはもらさでしるしつ

○はやき時の歌と後なるとのわいたためもありぬべけれどくはしくしりがたき事なれば題のついでにまたがひて去るしつ

○蝦夷島をよめるなが歌四首なるが末の二首はうつしあやまっておほくよみがたければとてさきに村田の何がしがのぞきつるをいまはその二首をもうつしひがめたるまゝ去るしつ

○長歌またはふみに真字もてかきたるがありしを後の人のよみあやまるべきものなればとてかのながしが平かなにあらためたりしを今はものとごとく真字にかへしつ

さるは後の人を見て真字かたつきにもすべければなりすべてふたまき名づけて賀茂翁家集拾遺とせんいふ
文政九年三月 伴 直方

賀茂翁家集拾遺

春歌

年内に春のとく立ぬる心を

行年のそらに霞のせきしてや残る日数を春となすらん
さだめある日數ばかりなごりにてつきぬことしの春に成ぬる
としの朝によみ侍る

花に又心な染そけふよりははふらすましき春といふなり
去年庭に竹をうゑて侍れば雪いとおもしろく侍
りしことしの元日によみ侍る

霜雪の岡生の竹の末とけて下露そいぐ春の初風
春東より来る

天か下のどかに明る日のたてに立や霞の衣かせ山
【東西を日經と云事日本紀に見ゆ此詞萬葉にもあり】

都早春といふことを

のどけしな春の心も手車のとしにひかれて先やきぬらん
【都をさして登殿下といへるからことをもて詞とせら
れしにや】

む月はじめ牧野駿河守のあるじにてあたご山に
て歌よみけるに春望といふことを

ゆ

雪中鶯

見たせば霞むばかりの色ながら都の春にしくもぞなき
あまねく人の耳馴たる柳櫻を本歌とせられたると見
ふる雪を分ても啼か鶯の聲せぬ里は春も去られじ
【初音の巻の詞におとせぬ里はとあり】
武藏野春といふ事を

春されば雪消うるほふむさしのに誰ほりかねの井ともわびまし
梅柳渡江春といふことを京極道清入道のもとめ
らるゝによみてまゐらせける

雁のたつ入江の波の南より春風あくる梅柳かな
朝梅

梅の花かをれる日より朝なく、妹にわかれしこゝちする哉
貞隆侍従の家に梅の花見むちぎりのかねて侍り

つるにむ月のはつかまり三日雪のふりて晴にた
るほどたて文のやうなるが詞はなくて「心あ
てに間人もがなふる雪に梅の立枝は見えまかふ
とも」と聞え給ふにこたへ侍る

いでやけふ雪のなごりの夕風に梅問ふみちはまどふともよし
やがてまゐりて侍けるに鶯だにも堪ぬにや花の

あたり侍らふなくを

うす雲に梅にほふめるあかなくを誰かまさと驚のなく
養泉院の家の辻子のすゝめ侍る多年榎梅といふ
心を

いく春かかさし来つらむ梅の花老かへるてふあはれそふまで
梅の花ををりて人のがりやるといふ心を入々と
ともによみける

君がためいがてならんと春のよのくらぶの山をたどりつる哉

澗落梅

谷陰や岩根の梅に風過て雲消の水に雪ぞながるゝ
水郷柳

翼のある洲さきの柳所がら縁ことなる宇治の川水
柳ある家に人來れるかたを

柳にもあける家哉我袖のみどり過して問まし物を
家に歌よみけるに待花といふ事を

都にも今年はいたく風さえてあらぬ頃まで花ぞまたるゝ
おなじ日手向を

なら坂や春の越ゆる手向山いつしか花のぬさはおかまし
尋花

よしの山花咲かたもまりぬべし入にし人を先やたづねん

二月餘寒を在満か家にて

なかばたつ春にかさねるさ衣のをつくば山に雪はふりつゝ
不破關花といふ事を

不破の山往來をとむる花なれば散るは關路のあるゝなりけり
春風もとまらぬ不破の關屋には内ともおなじ花ぞちりしく

山家花
庵ちかく鳥の聲くさえづりて山靜なる花盛かな

田家花
散る花をなほしろ水にせきとめて心有げにみゆる里哉

庭花
さらぬだによし有庭の楢みな花咲まじる春の此頃

隣家花
さらでだに楢よしある中垣のそなたゆかしき花の此頃

三保子のもとより「櫻花君かみきりにうつしう
ゑてえならぬ色をあかず見せばや」とあれば返

し
色香あるけふのことばをそへて見む大方花をうつしうとも

三月くら梯正房が家にて歌よみけるに屏風に遠
き山に花あり駒をとめて見るかたを

むさしあぶみすがにかけし方なくは遠山さくら行て見しやは

池上杜若多といふことを

かきつばた水の底にも咲にけり池のまにノ多きのみかは
春のはて

櫻だにまだちりのこる此春をいくかもしなしたれかいはらん
ちかたけのなり所を花おもしろしとてあるじせ

んと聞ゆるにけふはやよひのつごもりなればま
たなき春の名残なめりとして正久重敦などかいつ

らねてまかで來侍りうち霞みてそほふる雨の空
のとやかなるに青葉がちなる梢ども、中くう

つり行氣しきのをかしきをげに外の【古今集に
外のちりなん後のかたみにとあり】後なる櫻の

咲まじれるも多かり所は海のつらちかかれど山
里めきたる柴の垣ほのあたりく心まらびした

るにつみたる花のうちより露おもげなる山吹の
うちなびきいでたるなどえもいはぬ庭のたゞす

まひなりあるじもうち物かたらひつゝ、こよろぎ
のいそぐとはみえぬ物からさかなとく酒す

すめなどし侍ればいとゞ所がらなる日ながさも
おほえずなむ

いとしくよむある庭の楢みな花ちりまがふ春に口かな

三月枝直が家にて歌よみけるに露中花を

つらからの物なむ旅のながめ哉故郷へだつ花のまら雲
【此歌須磨の巻のことばをとられしなり】

そのむしろに山家暮春といふ題を出して庭の木
々のまけきがさる心地すればその心をよめとあ

るじのいふに
其山の楢よしある宿とへば花より後の春の昔の得ならず

あはれさの秋にし長くまさる哉わか葉さゆゆく春の山里
【若葉きり行は須磨の巻の詞によられしなり】

春山といふことを女にかはりて
花さけば更に入てしとらぬてふ恨覺ゆる春の茂山

【萬葉ぬかだの王の春山秋山の争の評の長歌を本とし
てよまれたり女にかはりてといふ所に心をつくべ

し】
山吹咲たり見る人あり

山城のおての里こそあはれなれ今はの春の山吹の花
歸屬稀

いつの間に大かた雁のかへりけむまれなる聲をあはれとぞきく
春のくれに春道がなり所をとひてよめる藤を

まちとはん人の爲にもよく見てむ春の名残の藤なみの花

花もちり春もくれぬと見ん人に見せばやかゝる庭のけしきを

家に歌よみけるに山家五月雨といふ事を
さみたれのをやめば見えて雁ちかきを真木の葉しのに口立るなり

正月わかなを籠に入れてもて来たるうた

故郷時鳥
夏草を大津の宮の郭公むかしこひてやまのになくらん

湖上春曙
にほの海や沖には山もなかりけりさゝ波かすむ春の曙

【人麿の近江舊懐の歌に夏草が繁く生たるとあり】
人とわかるゝにほとゝぎすのなくを

夏歌

更衣

ならひとて今日は身ながら心にもまかせず更る花衣哉

橋
おもほえぬ心ちこそすれ橋の花ちる里の夕風の空

首夏

昨日けふ夏の衣になりぬれば心に染し花もかひなし

霖
日なふれば竹の落葉もさみだれて昔路もわかす問人もなし

路卵花

うちわたす遠方人の袖の色も見るくわかぬ野ぢの卵の花

琴
あふ坂や東てふ名のつま琴は清水に聲のかよふなりけり

伊久米の君のもとより「ひとこゑもこゝろづく
しのほとゝぎす君があたりを鳴かよへかし」と
ある返し

【直方云涼とりしといふ詞委しく本居か玉あられに見
えたり日本紀の歌にあらゝ松原とあり】

夏は君かことそふ郭公大かたにやは聞ふるすべき
夏は頃人らと、もにふりにし世をまのふ歌よみ
けるにほとゝぎすを

舟納涼
【たゆたふは萬葉に猶豫の字を書り】
六月の末いとあつき夕つかた井上河内守の御も
とにて題をさぐりて

涼みとる舟のたゆとふ鹽田河夕波の上にも月しいでにけり

秋歌
残星
みだれつる螢やいかに秋来ても雁につぐへき涼しさもなし

【たゆたふは萬葉に猶豫の字を書り】

萩風
さなとりておもひこそやれ天の河ひとり引らんともしき小舟

秋ちかき夕の風の響るまで心かるげにゆく螢かな

ことしふ月一日に秋もたちぬといへど猶おぼえぬ
あつさなりければ七日のゆふつかた友一人か
たらひて川に小船うかべたりはしのもとなどは
さわがしとてことそぎてまづかなるかたにこぎ
わたして

家に歌よみけるに大江山夏を

【萬葉に雲の波たち月の舟とあり】

時鳥鳥羽田に時や過ぬらん大江の山の蟬の諸聲

萩原やまめて程なきわか宿に先おとづるゝ秋の初かぜ

【ほとゝぎすはとはといはん冠詞なり】

秋風
秋風のふきと吹ぬるゆふべには空の色さへかはるべしなり

こえ行は蟬の鳴音の大江山楡の空に秋やちかづく

秋風
秋風のふきと吹ぬるゆふべには空の色さへかはるべしなり

照れる日ないとふくとおもふまに年のなかげのたりにける哉

川に舟うけて月をみる

六月に不盡の山をみて

秋風
秋風のふきと吹ぬるゆふべには空の色さへかはるべしなり

板木に出せり
するかなるふしの高れはいかつちの音する雲の上にこそみれ

秋風
秋風のふきと吹ぬるゆふべには空の色さへかはるべしなり

夕立風
ふりぬるも先こそくもれ吹あまるちりをおほぢの風の夕立

秋風
秋風のふきと吹ぬるゆふべには空の色さへかはるべしなり

連夜鶉河
うかひ人睡るやいく夜心とも波のはるく月もみつらん

秋風
秋風のふきと吹ぬるゆふべには空の色さへかはるべしなり

ほとゝぎすを

秋風
秋風のふきと吹ぬるゆふべには空の色さへかはるべしなり

十五夜

おのがまゝ見る物ながら船きほふすみた河原の月影ぞよき
照月の空に心のうかれつゝ今宵となればうき秋もなし
くらぶ山をなたに月の猶しあらは間に越ても問むとぞ思ふ

入後暮月

契つる友のむれ来て見るよひの月夜よき程うれしきはなし

會友見月

あはれまた嗚て来にけりみよしのたのみわすれぬ秋のかりかれ

田上鵬

わざとにはあらねどおもひつゝむべきにて多く
はこもりをるに九月十三夜うちはへてくもりけ
ればかひなくもあるかなといひてながめをるは

ど友たちの二人間来てかゝる夜をばいかにせむ
酒さかなこそ興をやるへけれなどいふに
めでぬへき空も心はれぬよに問こそ人のなまけなりけれ

葉月十五夜ばかり清子のもとより萩の花につけ
ておこせ侍りし折しも雨ふり侍りしが夕つかた
よりははれたり

ぬれつゝそまひてそ折れる置露に月宿れとて折れるを萩そ
かへし

ぬれつゝそ折しなきけも願てまたひぬ露に見宿りけり
こよひの月みる心を

けふしもそ晴かたかりし雨雲におもほすなれる月をみるかな
九月十三夜はれやらぬに例の二人三人来て歌よ
み侍るに

蘇れどもおもふ友にしとはるれば今よひ月見ぬこゝ地やはする
ところしめ家作りしての長月廿一日にはじめて
人々とひ来て歌よみけるに秋興といふことを

わか垣は秋の千ぐさなまめつれば花のいろくうれしかりけり
きぬたを聞といふ事を

から衣うつ夜更行風の音の遠くや人におもひよすらむ
藤原菅根集

萩に鹿かきたるふくさに
聲は今枯野の小萩なつかしみかよふか鹿の霜にあとして
右はのちかはりたる時ならめ

題をらす
あつま路のうつの山への時雨つく秋風寒し蕨の細道

九月はかり犬上衛が家にて歌よみけるに野草欲
枯といふ心を

秋の花なまめく野べと見しほどもあらしになりぬさかの山風

長月

故郷の高まと山にゆきてしか紅 かさゝむ時はきにけれ

紅葉盛

秋ふかみ瀧の糸のみ染ぬこそ山の紅葉のさかりなりけれ
足引の山田もるをちにと、はん今いく日ありてもみちしてまじ

紅葉 一本秋の歌として

もみぢする時にしなれば足引の山のあらしぞものうかりける
あなみ野のあから櫛は染ぬれどちるは見え行秋にもある哉

秋のはて 文伯歌集出

冬歌

倉梯正房かもとにて残れる菊めづるかたを人々
と、もによみける

月照殘菊

うつりあへぬ籬のきくに匂ひては月にも秋の色そのこれる
板本にあり
かなな月のころ人に山つとにそへて

冬たつや嵐の音の稚かもと山にも身こそ宿しわびぬれ
時雨をよめる
神無月嵐をさむくまくるゝそ霞や雪の初なりける

ゆき

打きらし花とも花とあるものを雪とは誰か名付そめけん

寒草

かみな月残るみどりもはつかなる春を覺ゆる庭の冬草
霜もまたかへりて露の玉ざゝに春日にはへる神無月哉

冬日

よ謝の浦や空もひとつに星晴て遠よる波に千鳥鳴なり
雪のふる日人のもとへ

浦千鳥

いとしくうれしかりけり契あれば来てふに、たる初雪のそら
ふる雪に我まつ人のいかならん人まつ我はあともおもほす

浅雪

深山人を遠つあふみの濱松にふるうす雪のめづらしきかな
米倉昌長のもとにて竹雪といふことを

米倉昌長

たか草や下葉もしにふる雪のくはしくめでん友ぞまたるゝ
家に歌よみける時贈答の歌人々よみよみけるに

冬の月夜人におくるといふ事も正房「あはれま
る人定めよや冬の夜の月かあらぬか雪の光か」
返し

綱代を見て人に

われを君をちくる人とおもへばやひをへて待におとせざるらん
綱代見に君や勝ふとよる波のいざよふほどに日をそふりぬる

正房

なやらふかたかける繪を

【躬恒集に鬼を】鬼すらも都のうちにはみのかさをぬき
てや今宵人にもゆらんとある方相をよめるなりされ
と鬼はかくれみのかくれ笠をいふことといと
ふるくよりある事なればかくはよみし此歌はこれら
によられしと見ゆ】

むさしに下ける年のまはすつごもりに

枕とて草も結はじ旅衣春を明日なる年の名残に
四十五のとしのくれに雪のふらざりければ

年くれて空にはふらぬ白雪のまらすかしらにつもりそめぬ
これはくしけつりければまらがのまじりてけつられ
けるにおどろきてよめるなり
としのくれに

ことし行夕になれば花鳥の色をも音をもおもはざりける
世の人ごとに四十二のとしはつゝしむべきなり

といへる歳暮に

墨田川人やりならぬもろ舟もくれぬといそくけふのとし波
春をまつやどり人は人による身にもつる年こそおのか物なれ
同じ年のくれに

春立て後行年は別路の柳もまゆの又やひそまむ
十月ばかり残のきくをめぐるとて

きく儘に齡のおべき琴の音の折しもかよふ花の下水
うつろへばやまとにめぐる白きくに唐紅の色もかれつゝ

戀歌

あした

うつり香を袖にかすめてたどる哉一夜の夢の春の曙
涙そふ学生の下草分わびぬ露しあればといひし名残は
【萬葉に露しあればあけてをいゆけ母はまるとも
いふを本とされたり】

片戀

ゆるしなき色とはまれど戀衣こき紅にひとりそめつゝ
うしつらしおもへばおもふ人の世のなまきしなきは戀路なりけり

被忘戀

忍ふやと人の心を見しほどにわするゝ草の花になりぬる

文伯歌集出

相もふこゝろをよめる

我中は五百津つとひの花なれやかよりかくより見まほしともふ

縣居家集に出

切戀

けぶりともなりてやむべき比なれや身もあつきまでもゆる思は

尋戀

橋の陰ふむ道に問うらも先なる方しならてはかなき

人のもとにて題をさぐりて冬恨戀といふ事を

かれゆくをふしうしと見つるより心にさわぐあしのうらかぜ

寄花戀

咲花にこゝろかよへるあた人はうつるふものゝまはしきかな

夏戀

夏はたゞ道しなしとや問ざらん誰を待間の庭のよもぎぞ

まがへても人やあやめのかり枕今朝うつり香のつゝましき哉

茂樹か家にて歌よみけるにあらそめを

題しらす

おしふ人來てふに似たる夕べかな初雪なびくまのゝなすゝき
玉さゝの下ばもまゝにふる雪のくはしくいもがうへを聞ばや

眞柴たくはしばの里の海風思くたくる世にも有けれ

春戀

おもかけな花に霞めてたどる哉一夜の夢の春のあけぼの

後刻戀

涙そふ生の下草分わびぬ露し有ばと言し名残に

哀傷

みな月もちの日故少輔のぬしの御たま祭らるゝ

と聞て

あまかける君をしのぶとふじのれのゆき消の水に袖ぬらしつゝ

又十年のみな月に繁子がもとへの文の内に

うき事しうれしき事しおふ人のなくて十とせを過にけらしも

父のおもひに侍りし比

あらたへの衣の袖に玉はやすむこの浦なみかけぬまぞなき

貞隆侍従のめきみの身まかりたまふをりによみ

てまゐらす

をのこしもの君か袖だにさへまじな撫子の花もちれる秋風

八十つなやい
八百綱や千引の岩はへたてれど通ふよしなきよみの道かも

八月はかり秋田朴翁の母の五十年のちのわざ

するとすゝめ侍りしに秋懷舊といふことを

秋か猶もたふ昔の遠つ人願も恨りにあらぬものゆへ
ある人の妻のいたみに暮秋といふ題を

秋そ行萩の下葉の露の色を獨ある人の袖にのこして
うちつけに袖の時雨となりけり秋を見はつるゆふぐれの空

雑歌

書

おのつから故やはそほの文見ても心ほしとの心なからに

夢

夢とのみ身のむかしへはなりて又今見る夢ぞむかしなりける

磯巖といふ事を(藤原菅根集)

大君の遺の都の八十の津に所せきまでうくたから哉
紀行に出たり

同詞書は板本にあり手ならひに物に書つけたる詞と

あり歌はなし

生とし生る物の中に人ばかりかしこきものはあ
れど何そのわざや人皆のかしこければかたみに
かしこあらそひをするほどに世中うつろひかは
り心えらひよこしまに成行めるあしたのけにあ
きて夕のまうけをなすすけふの命ををしみてあ
すの死をも思ひまうけぬ鳥獸こそ中く古へ

今かはることなき世を見ればかしこめきたる人

ぞ鳥獸にはおとれるなりけりこの心をおもひた

らぬ人或はかれになづみておのれとくるしみ或

はこれをつらみて世をすてなどするよ生れきた

るまにまによろづのこと思ひのどめばあえなん

かた山のやまへうつらふうらせばく誰か此世を行そむくらん
板本に歌あり

關羽といふもろこしのを、しきかた又かけの鳥

と菊の花あるかたをきぬ二つに書たるを人のせ

ちにもとめ侍るにいかにもよみてたまはらんと

永正かねもごろにいふに關羽のかたに

あめ行や龍てふほこをうらふりて猶雲風の末はおこさん

菊とかけのあるかたに

白菊の花も老せぬ庭つ鳥これや常世のおのが秋なる

米倉のぬしのもとめて繪に書つけたる三首い

と、りもあへず筆にまかせてなん

あまの原(文伯歌集)

あまの原みればやさしな人ばかりむかしにかはるものしあられば

たまくや玉島川のつりにしれて年のなかくおそほららん

山下のをちはあが母のすみける岡部の宿のまへわた

年魚の繪

卯月十一日たちてはこねにゆあみに行侍り小田

原のうまやに歌などの事はやくよりいひ侍る惟

岑といふあり今はこゝろにもあらであれども猶

ながめぐさはすてざるなり山へにいとたびく

問来て侍るに此山にいよくともえられぬうもれ

杉をとりて、調度などに造りて世中にもてはや

すめればよせてよみてやりつ

あしがらや竹根の谷の埋れ杉おもひなくちそあらはるゝもの

またをだはらに柏木のながしといふ人いとね

もごろにとりまかなひてゆきかひにやどりもし

はべるに今よりは夏ことにこそあらめといふを

行かひの風の便りを過さめや夏このましき柏木の木

かけもよしなどいひてわかれぬ

いせものがたりの事をあけつろひ給へる巻々を

書うつし終りたればとて紅子が「ひがことに有

ける物をやよいかにいせ人ならぬ人まどひけん

といひおこせたるにこたふ

ひがこといひはとけどもおほつかなややいせ人猶もことわれ

えめ

むまし野は草の色く多かれど一本をこそ思ひしめけれ

ちりとたつうき名は更にいとほれど取手ばかりの契もそうき

かのことたへ女にかはりてよめる

ちりとたつうき名は更にいとほれど取手ばかりの契もそうき

ちりとたつうき名は更にいとほれど取手ばかりの契もそうき

(版本にあり除くべし)

雲の居る遠つあふみのあは、山古郷人におほやまめや

枇杷の實のかた

時鳥まばしまたなん櫛の散てもまかふ木のみやはなき

山のかひにやどり有麓に人來るかた

みよしの、人國山を問來ればうへも此世の外にぞ有ける

高殿のあるあたりに波のよするかた書たるふく

さのうらのくれなゐなるに(藤原菅根集)

波のかく家島の松のそなたなるうらこそやがてあかしなりける

こはのちかわか、る時ならぬ

春郷がいとこなるをみなのもとへは、きををく

るとて

玉は、きとる手ばかりのちざりにて空にうき名のちりとたつめり

古寺鐘

よしの山瀧にこたふる鐘の音に誰もうき世の夢はさめなん

物名

ひととききく

からのふみはなべての人ときくるを誰にかとほんやまと言のほ

魚名十

ぬきすたひはきあかつなほえしも見てまひこちいふかかしこひとち

かぐら歌

みづかきのかいれとしてしも昔より神さびげらしこの岡の松

賀歌

殿の四十の御賀によみて奉るうた

濱松の侍従の六十の賀に對菊延齡といふ事を

春神祇

吹風も枝をならさぬ御代にけふ猶こそいのれ花をかさして

越のくに長岡の君のいもうとの君八千子あふみのくに膳所の本多の家にいたりたまふ歌のこと源氏物語など中はべりしま、にはひ歌よめと人々のいふによみて女房のもとにつかはしける

【をるへくもなきはは、木々の巻の詞によられしなり】

萬代をたぐへんものは玉椿つらなる陰のしげさましつゝ萬代をたぐふとなれば松がえのみさなも君がこゝろならまし萬代を心のともと君そ見むなるへくもなき雪のなよ竹

七つ緒の八緒のみ琴まらへあへて今ぞ千とせをあそぶなるかも
同じ賀に杖のうた
ふつぬまを神にまつりてゆふつくる榮樹か枝を杖につきつる
肥前の大村の家の母君の六十の賀に寄竹祝といふことを東滿のすゝめ侍るに

うた

板本に出たるといま、異なるのみなり

ぬ山の八重雲の八十影高知や天津御座に天知や日嗣た、すと大御代を治たまへる大君のみことをもちしひけ鳥の朝立君が動つ、山もよりなめ響つ、山もさけなむみぬ山

名所松

この葉を松にかけてはみちのくの羅か鳥のへたてやはある

送別

春駒の足から山を越む日はかしこき道ぞ手向よくせよ

松契還年

契あるときほの松の青山を君ぞみてまし十かへりの花

寄若菜祝言

長閑なる南の海にまづ生るいそなほけふの千世祝ふ爲

詠蝦夷島歌四首并短歌

久方の日月のてらすきはみかも波風もなき御代にしも猶あらかしめもり部すゑおさへたまへばよろしなへえみし
かともは夏さればまとの弓にかつらつけ磯和の魚を小

小濱民部が父の六十の賀にて枝直のす、むるに

いとよりの濱のまさこの齡もてすむあしたつも猶契る哉
稻垣求己齋六十の賀を十一月晦日にし侍るをま
はすばかり聞て雪のふりけるが松の枝につけて
つかはしける

ある人の賀に松有佳色といふ事を人にかはり

なべてけふ春の色かは千世いはふ宿の爲なる松の一しほ
歌このみける人の賀に松によせてよめと人のも
とめければ

知陳が母の六十の賀に寄竹祝といふ事を

この母いとすなほにて物にか、はりくもくし
き事などをきらひてすぐれたる人にし侍り

國のかみの御賀に松契萬春といふ事を

侍従貞隆朝臣の京に御使し給ふを送る歌みじか

竹矢もてそかひにいなしは山へにかくる、ま、も射とり
 ては今も食つ、あまぎらしみ雪ふるなる冬まけて山に入
 居む股とて日のけにもほしいのちだにいきなん業をその
 あまりかたにか、れるたく布を松まへの里にまれに出て
 かふるのみこそよの中のもまらねばなにせんにほしき
 心もさらく外にあらすてかくしつ、年月ふればおの
 づから心の道もおのかじ、いでくるものかむかしへは聞
 えざりしを此御代の大きみのりはうへもなきをしへなり
 けりかしこきやかもひをまつり(鳥人謂神爲可母比)父母
 を老たひたふとみつま子はもめぐしうつくしわか草の人
 妻てへは眞言をもおほにはとはすもの食へば友にあかた
 へ酒のめば人にゆづらへなにももまるとしたつればぬす
 まへる事もなかりきふみも見すこともかよはぬ鳥わさへ
 かくしもありて神世なすすなほにも有か久方の日月の長
 くてらさへる君がみのりぞ天地の道

天地の道ぞことわりおのづからえぞがともにも上玄もの
 品は有りけりむらをおとなといひておとなしもさはな
 る中にあつけしの山のまにくすまふなる大きおとな
 はありけらしそがありさまはなみくのえぞにはあら
 ずからふとの鳥にかへ来てまかちなるこきしよそふ龍

のかた鶴むらおれるよき、ぬにまから太刀はきみどり玉
 手にはまきつ、こきしなすよそひはすれどうま飯のたな
 つ物しもあらざればとむよしの家にあらずてことくも
 まつるつかさしなきま、におほ君のつねの守りをか
 こめばあらふるわざのいにしへのこ、ろわすらへすがた
 こそまがちなるらめことこそはさやぎもすらめ日のもと
 の神の御くにをうつくしみ心うつりぬまかれこそすなほ
 なるわざのその外はまるともなく欲みなむえぞが心か
 たまさかにゆきかふ人のいひつげばかたりつげてもわが
 ともの人は中くやさしみとおもひしまらばさかしらに
 こ、ろやめてよ神の御くにぞ

雑文

まき田永世のあるじするに

坂本まちてふところの永世ぬしはたうばりのところせか
 らねどおほやけの御物てうする家どもたてみて、わたく
 しのまらうとゐはいさ、けなるを故あるさまにすみなし
 しはざまのつほのさま山里の木竹の藪原のかたへをひき
 もて来たらんがごとおのづからめきてよくうゑやりたれ
 ば二十咫ばかりならんほども百しろの里びたる思ひなん

するそれがかたへにおほきなる石の水げにす、しうまか
 せて水のおとなひかすかにまづくまと、におちつくみな
 月のつごもりはがりひとりふたりまで来たるをまたある
 じもともにあるじ、たうぶれは酔ふして見るものはをり
 のあつさをわすれておもしろし

あし引の山さかもとのやどなればかけひの水のたゆる
 日ぞなき」とぞいはる

萬葉新採百首解序(此序板本に出せるをもて此には
 省きぬ)

附て記す

或人いへりわれさきに歌のことまれるてふ人に古今集の
 ある様を問つるにその人云こはいにしへのことにて今は
 あきらかならずさるふるき事はさておきねと 又或人の
 いふ今より五百年まりさいつ比には三代の集をもと、し
 てよめり是にならずるに今となりてははたその五百年
 の比の歌をむねとすべしと然るに萬葉をしも唱ふるは益
 なきわざならずやとこたふ天竺のさか佛からのくし聖な
 どそのかみのことを述給ひしとかそれが傳れるふみを今
 だに學ぶなどは更にもいはすその唐國の歌は聖の撰たま
 ひしをはじめて世々にも撰み傳へ来て唐てふ世までなる

をめでたしとてかしこにてもこ、にてもそれに似ばやと
 つとむるなりけりから國のみかどはあまたたび立かはり
 てものごとにあらためらるれど學びのみちはいく千とせ
 もなう古きによりぬ物ごとにいにしへの人のいへるはよ
 ろしくていづれの世に用ひるにもめでたければなりまか
 るをわがすめら御國ののちの世にのみいにしへの學びを
 すて、下れる時のまかもあやまれるわざにまたがふべき
 理りあるものにやえまき侍らすかけまくもかしこきすめ
 ら御ことの神祖よりひとつ御すゑをつたへ給ふま、によ
 ろづのみちもいにしへをつたへ侍るとて他のみかどにも
 おくかゆかしくほめかしこみ奉る物を歌のみながれたる
 ふりをよしとせんこともあるべからぬわざなりおもふに
 此問る、語はよき人のいひ出給へるにはあらでまれ人の
 私におもへる意なるべしもしよき人のことならばすめら
 御國のはちなるべし高くないひそ人のきか

又或歌よみ法師の云歌はその家を定めおかせらるればよ
 りてこそ傳へめはた時のすがたをこそよめとこたふ天か
 下の道々はみないにしへよりおほやけの定めおかせ給ふ
 道なりたうたのみとおもふにやさるをいづれのみちか
 その一つ二つの家によりてのみ天が下の人に傳へよてふ

仰はいまだ承り侍らしたとへばその行ふ佛の道も多く
 の宗はあれどみないにしへの佛のとかれし條々をわけて
 唱ふるならんさて御時によりて殊に信せさせたまひて新
 宗をもたてらるれば必それにのみよれ古き宗にはよる人
 なかれてふ仰はなくて宗は心にまかせよてふ仰さへ侍り
 しまければ古き宗を信するもはた今の仰なり此歌も世々
 にさまはかはれど古き御代の書どもを捨よてふ仰はなく
 物ごとに古きを傳へし人をばほめさせ給ふことも多かり
 しかば古きによるもはた今の仰の中なり後の世にももし
 人まろ赤人貫之躬恒などの出たらばそれにこそよらせ
 まはめさる人の出こねばやむことを得ずして大かたの人
 人の家と申し仰もあるならずやまかればふるき世と申頃
 までのことを擧てふるき心詞の例をもて私を用すいふ時
 は古への道を傳へて今にもそむかぬわざならんとぞ覺ゆ
 るは猶ひがことにやよくいにしへのふみにねもごろに
 してわきまどはざるらんあらばぬかつきて去たがふべし
 私にすぎたる詞はいふにたらず凡學びの道はおほやけな
 るものにてよしあしは古き昔にのせてあるを見る人の才
 によりて明らむ故に古へは家をたてず勝れたる人あれば
 川ひ給ふのみ且傳受秘事てふことも聞えずその傳へしこ

とのわろくて傳へぬ人の語のよきも常なりたとへばから
 國のふみの秘ごとは傳らねどかしこに明らめぬことを此
 國にてよく解れし多きが如し古きふみを見ずして後の人
 の私にいへることをよしあしもわかず信するまれ人は心
 を人にあづけたらんが如しさればあめつちに去たがふ古
 へのことを心によく意得てわが和魂をさだめて後するの
 世のならばしをもおもはゞいにしへのこと、ても撰むま
 じきにあらすのちととも捨べからぬこともあることをお
 のづからさるとるべしさてこそかみろきより傳へ給へるお
 ほんさだめにそむかぬわざなるべくぞ覺え侍る
 又問さらばいにしへのことを學びて古事もてうたはよむ
 べきにやとたふまかはあらず歌はたゞ心なりすがたな
 り心やさしかれどすがたわろくてはあるべからずすがた
 よけれど心のわろきはいよ／＼わろし此二つの中に心の
 ことはたやすく思ひがたしこの百くさいにへるをよく見
 て意得たまへ姿はことばなり古き詞の中にたゞしくもみ
 やびかにも憐にも面白くもあらんを撰みもてその物に
 つきてなほき一つ心をよみ出るのみ一つ心なる時は短歌
 にてもおもふこといはる、なりさるを後の世にはよろづ
 に心みだれてよこしまにはたらきなれ詞も器にものおほ

くおしこめたらんが如くいひなれつればたやすくは一つ
 心をゆるやかなる詞にてつらぬる様にはなしがたかるべ
 しこれは此百くさをよく意得ん時に心よりおもひ得べ
 し古への人はいとやすらかにのみあるなり凡世の風俗う
 つれる様をおもふに神武天皇よりしてのちに成務天皇の
 御時に至て成れりけるさて神功皇后三韓を討給ひしより
 物繁多になりて一變せり然ありて後に推古天皇の御時又
 少しことになり來て孝徳天皇の御時によりしく定るべか
 りしをほどなく崩じ給へばことなることなし天智文武文
 武三のすめらぎの御時に及びて制度甚ことになりて奈
 良七代は太似たり桓武天皇の今の京にうつり給ひてのち
 に嵯峨天皇の御時より又かはりて延喜のころにおよぶか
 かれど天智の御頃より大様は似たりたゞ朱雀天皇の御世
 の時より皇威漸うすく權臣専らになりたれば又一變して
 一條三條の天皇の御時におよべりかくのちは皇威いよ
 よつよからず亂を催せるものなり是よりのち今に同じさ
 れど大かたをいはゞ齊明孝徳天皇のほどまでは一同とし
 文武文天皇より奈良までを一同とし嵯峨天皇より延喜
 までを一同とするともよし、れば後白河天皇よりこな
 た近き世までは凡人情も世事もことならずよろづの道も

まかりかくうつり行世々をみる時はまどはしさて此百年
 あまり天が下大に治まりたる事にしへにはぢす故によ
 ろづの道もおのづから古にかへること多しか、る御時の
 人かの五百年の前亂れかはれる世の時を學ぶべき理りあ
 らん物かは
 齊明紀童謡考の始にまゐるせる詞
 かみつよ、のふみらにえときやらぬものさはなる中にう
 たにてはやまとぶみにまひら／＼つものくれまか／＼のわ
 ざうた萬葉集に莫囂國隣まか／＼てふうたこそおもふに
 今の都となりにてゆこなたにえよむ人あらむとも聞えず
 なむあるまかるを荷田の宿禰の(東宮)うしこそよよろ
 づのかみつ代々のふりにしことふりにしふみふりにしう
 たらをときあかしぬるまに／＼此ふたくさを明らめ給へ
 りきさてものならふ人々にこのふたつをこそばつねにわ
 すれずおもひつ、いかでこれときうるまでふることま
 ねびたらんとぞまめされしを後にこそ聞しかおのれはい
 とするほどにかのわざうたのことを後にまかともよみつべ
 きものなり今はむそぢになりぬればいましにいふぞとて
 口のまに／＼つたへたまひにしこをものちに間にその荷

田の家のいろとしもつたへたまはざりしはや萬葉のかの歌をばとし経ておもへどはさるべきよとおほゆることをも得ざりけるに此ちかき年に此うたどもをすべて去るさむとするほどにおもひ得つることを去るしてかの荷田の家へとひつかはしつればうしのおひなる攝津守といふが今は家つぎであるがこたへに凡の意むかしまるしおきたるにひとしいさ、か違ひはありぬべし中々にくはしさそこのまされりとぞ侍るこを見て三とせばがりこ、ろ入つるかひよとうれしうぞあるされどはおのがかうがへなればこ、にふかくふる事まねぶ人たちの中にはよりに傳へつたこのわざ歌はやおのれに心さし傳へ給へりしなれば大かたにすべからずこ、に村田の春道てふは世々に家さかえうからやからひろく物ゆたかなりそのおほちもち、もふみ見歌よむことをこのみしといふ今の春道春野のはらからよくおやにつかうまつりよくその身をおこなへることはやき時に市人もとなへしといふこはよに聞ゆめるまなびをつたへて後はたとせばかりおのがむくらふのかどをふみならしひたぶるにいにしへの手ふりになりぬそれのみかはその子のはる郷春海のはらからまたわか、れどち、の心をつぎてまことある事世にこと

にいにしへのふみの道をしたふことはたふかしか、ればさるべきそのみちの家のいふすらかくつたへつ、遠つおやの心まらひに似たるはありがたきぞまければ末がするにも絶せざらんことあるしわれいまはむそぢにおほくあまりぬればいかにつたへもおろそかにもなりなんとおもへばけふ春道へ傳へはべりその心ざしとほらへなば春郷につたへんものとして世すてにいへることをも見てゆめみだりになせそ荷田のうしのみたまの天かけり見たまはむものをいとまかしこし

賀茂翁家集拾遺終

賀茂の川水

真淵

からうじて晴にたれど猶ねたみがほなる雨くもはたれもたれもながめわびつ、侍るに思ひかけずおもしろきはぎにふみつけて袖もまよと、にもてきたるは給ふなりけり今夜の月まつ露は何かしの玉のあたへおほゆべかめるをいかにかきわけつ、るにかはとて折給ひつらんさなげもこののはのこ、ろふかさもよりのたもとにはあまれるを中くとみのかへしもえせすなるほど花やかにさし出たるがぬれたる花に待とられぬるなどなれの興をかはくらべん【かけうたぬれつ、もまひてそ折れる置露に月やどれとて見する眞萩ぞ是は僕がをば君の十まり五つばかりの時眞衛より贈り玉ひしうたなりこのふみはそれにこたへ参らせしにそある】

こよひの月みるこ、ろを

けふしそはれがたかりし雨雲におもはすなれる月をみるかなとしの初の御ことぶきとて玉づさにとこよのこのみかすかすそへられて忝なく給りぬ其御たちのかそいろのき

みく君にもかはらせなき千代の初はるむかへ給へるぞつるかめの御ことぶき此御事におはしまし候よもきふにも春くる跡をばらひて人も行かひ侍れば御よろこびおぼし給はらんかしかつ一日はかたく問ものすべきにて申入て過しを人はしらせなど淺からず思し給ひしとよおふなく聞え給ふめるを見てあか身のいやなく侍りしかな遠からぬほどに御まめしのごとく友だちをさへやとひまいりてかたじけなき御事のいやはのべ侍りなん二かたよりの御ことづてよく御とりはからひ仰られて給ふらんかしこなたよりも同じく申まいらせたくこそさてはことのはかすくみせ給ふに心深き様いとしく承りぬ點あひ侍るは中く玉のくもりにこそかつとりあへぬことながらた、にいやをいはんよりはとてなん

さす侍るなり

清いの君御もと申給へ

御ふみに聞えらる、やうつぶさに承りぬ歌どもみせ給ふめるに此ほどいとくことしげくてたぢちにもかへし侍

らざりしなり御いたみの歌どもよく侍るべしかなたへも
聞えさせ給ひてんや身そぎの歌かきて給へかしすべてか
かる歌よまんに後の歌どもは皆くいひふりて手づゝに
なり來りたれば今はふつにさるをば見給はで後拾遺より
上のうた歌仙家集などつねに見給はかへりてめづらし
きおもむきも出來ぬべしといふはかなげにいひなし給
へりし男のうたとはたがひある事を専ら思ひめぐらされ
なんされど古き歌は中く男のおかしくはかなげなる
も多なり源の順にや此題にて

草の葉にはらへかくれば久かたの天つ罪とは露や置ら
ん」これはかの六月祝の祝詞に(中臣祝云は非)天つ罪
とは云々國津罪とは云々といふを以てとりなされたりか
かる心なご後にはふつにみえ侍らざるなりおのれもこれ
らの詞より思よりて

天つ罪はらふ夕は雲のふく風もす、しくなりにけるか
な」とぞ此度よみて侍る是はみづからほこるとや思さん
はかたはらいたく侍りかつてくさる心にてゑるし侍る
には候はず古歌をみれば後になき事をも思ひ得らる、て
ふことわり聞えんとてのしわざなり天つ罪はらふ事につ
けてはた罪を得んそねなきなり此ほどのあつさもいき

もつきあへず侍るをいよ、しもおこたり給ふと聞そ昨日
の祓と共に心も涼しくなれるけふの初秋になんまいら
すめり

長明四季物がたりの事

雨も嵐もきらひて侍るを御ことなうおはすにやおのれさ
はりなうは侍るを秋の半比よりむくつけきまね事多くて
人やりならぬむねくるしめ侍り御殿にてはいろくの仰
の中にいにしへよりわが國に用ひ來れる尺寸はかりめな
との事にてや、大かたに考得てまいらせし尺は日本にて
は三度かはりつるなり茂卿などから國の事はよく侍らん
が此間の事はふつに知侍らで度量衡考には書侍りしぞか
しまた小笠原右近殿にてはなり平繪をいろくすみよし
内記に書せばやとてその料のそうぞくも何もいろくた
のみ聞え給ふに四くさぞゑるして參せつ是は風流なる事
に侍れば其内見せ聞ゆべし昔のそうぞくの事いとくこ
とむづかしくて田安の 御前へもうかひ候てゑるせし
もありさて歌仙歌の事いろく考へ候へば後拾遺序にて
明にうたがひ晴て候よりて其外をも考て漸くけふぞゑた
ため侍りそより書ておこせ給へるにいろくの異同を
ゑるし侍候ま、返し進せ候多く見候へば拾芥抄なるがよ

し其次は御記しおこせ給へるもあしからず候上に一二な
ど付たるは皆よろしからず候なり何事もとりみだりかく
のみなん又長明四季物がたりを眞か偽かと問人侍りてく
はしく考侍ればいとくふみも書つゝけ得ぬ人のつくり
て書たる物にて行ごとにあやまりもあり又長明よりはる
かに後なる八朔のたのむの祝嘉まやうのいはひ杯の事も
侍り皆くいと後の事なり是らもことのついでに申置な
り心得て置玉へかしおのれ申候はよの子か月次よりは
とおとれりといひて笑へば在滿は同日のさたにはあらず
といへり大笑く世の中の人はいかで名におそる、にや
方丈記とくらべ見ば直にゑるき事なるべきをよき人のお
く書ありとて貴ぶ人もありといへるぞかし

むへの事

一日のことくはしく聞え玉ふぞうれしきされどよくも覺
えたる人のおはせねば中の御殿わたりへ聞え候てのちく
はしく聞え給んよし御心くるしくし給へるぞ忝き其中に
頃日考へ候は近江國蒲生郡王の濱といふ所より毎年十一
月朔日に朝廷へむへを貢するとなり又本草にみえたと
は實の様葉の様もことにて今山城などにては常盤あけび
と申由本草の萌子に似たりと云り但郁子をむへといふ事

は新撰萬葉集にむべ嵐をといふ歌に郁子の字をかりたれ
ばいと古き事なり和名抄には嵐の類に入て牟閉と侍り延
喜式に三所出たるは菓樹にて侍り本草とはことなれども
昔より近江國より奉りて梨子柿柑子などの類の菓子なり
其子はゑれ侍れども食う事は此度聞え給ふよりゑれたり
又籠の右はなきよし是は外居の形によく似たり今のほか
ろといふものに筋まきの様なる形あればほかは昔はか
様に葛などにてせし形なるかわらにてするも同じ事なる
べし又式に輿籠といふ物ありてそれはよこにおふこを二
本付て持とみえ又あしも付たりとみえたれば其こしこの
形ののこれるにやあらんされど此ふたをゑめたる物有ぬ
べし是もかつら又わら繩などにてやゑめつらん其事と今
も十一月朔日に奉るにや又王の濱といふ王はわうとよみ
候やいか其郷より侍るやそれを仰やられし時さる事
はゑれかほに候儘おそくともくるしからず候儘御たづね
御便り次第にたのみまいるもしなされにく、候はゞくる
しからず候大かたの事は詞候へばゑれ侍り台記の別記と
いふにもみえ侍りしを其記持不申候はで考へがたく候こ
の記は世になき物には侍らねど御當地にてはたやすくは
持たる人なし京には書林にも有之ものなり 御殿などに

候は、ひそかに拜借申たく候京へいひやるも大部なれば
めんどうなればなり尤右記は本記十卷別記八卷あるもの
にて宇治左府殿の日記なり別記は此方に有かね申候

翠の事

おほなく御ふみかたじけなくいよ御さはりなく御
立なれ被成し山承り心落る申候わたくし無事にをり候御
心安かり可被下候さては古今抄の事頃日よりうつしか、
り申候これにつき今朝あたごの下へ人造候紙など調候に
金三歩ほど當分入申候ま、それを御こし候はんやとの事
に御座候一日二日の内におこせ給り候様にとぞんじ候

五月兼題は三首にて候

橘 霖 翠

霖は元來三日以上の雨をいふ字に候へどもこの組題五月
雨の所に置候ま、さみだれとよみても又は詠めなどかけ
て五月の様をよみても叶候翠は雜題にて多くは古事をよ
み候て叶申候博雅せうしきの流水などの事又は松風に聞
なし又は舜の南風の詩をうたひて翠を引給ふを夏の雨の
風にかけてもよみ申候又は千年の桐を以て作り又は高山
の嶺に得たる桐にて作るも又和翠をも是はやまとごと
ともあつまごと、もよみ申候和翠は絃は六筋中の二筋は

ことを一所つゝかけて五筋にて引候又翠にはなげきと
いふ事侍り古今にわび人のすむべき家……又萬葉に翠と
ればなげきさきだつ……この下樋に妻やこもれるとも
よみて禮記に清廟の翠一唱三歎といふよりの事なるべし
惣てなげきといふはなに、ても感して美歎するも云うれ
ひてのなげきばかりにはあらず故に古今いせ物語にも賀
のところ業平花にあかぬなげきとよみ申候まるし是は後
世は俗耳にいかゝに候ま、賀などは忍て能候

竟宴の事

ちかきほどに古今集竟宴をし侍るべしさる心の歌よみて
給へかし二年ばかり古今集を會讀して頃日終り侍り竟宴
といふはケ様の講などの終にはその書の惣ての心にも又
其ふみ傳へて末長く絶じとの祝儀も又その書の中にある
人の事などを各分ちてよむ事なりたとへば日本紀竟宴
の歌に蛭子を得て

たらちねはいかにかなしとおもふらん三とせに成ぬあ
した、すして」下照姫を得て

□□□下てるひめのつまこひは天に聞ゆるたつなら
ぬ音を」仁徳天皇の御事を得て
高き屋にのぼりてみればけふりたつ民のかまどはにぎ

はひにけり」是は其竟宴の歌には詞少しかはりたりしな
りそれをなほして新古今に右のごとくしてぞ仁徳帝の御
歌として入れしはあやまりなり是は時平公の此天皇の事を
日本紀竟宴によみしなりこれらを以て何にても古今えら
みし六人の心にて何にても御よみ候へばかなひ侍りな
り御けいこの爲申入候けふはたんけにて引こもり侍れば
かくのみみだりかはしくなん

柳筥の事

御文かたじけなくこのあつさに御さ、はりなく御入候よ
しうれしくなかつ懐紙二くさおさめ侍りさるは柳筥の
事安きほどの御事になん長七寸は、四寸高さも四寸ほど
にいたさせ申候御筆など置れ候にはさるべくなんくるし
からぬ御事になん何事にても承り侍るべきなりされども
いとくむかしへは柳のはそき枝をあつめて折まけなど
して今の柳こりなどの猶あらくしき様にしたるを其の
後木にてすならんときふちをば畧し是も板にてしなどし
てかくもちりもつかずなり行たるものなりされば九重杯
にては柳の木の板にてさせ給ふなり此たびも柳にていひ
付侍りかつうちとけことながらさきにはその御頼みと
ぞんじあたひをいとく引させ侍りしなりたびく

はさは成がたきよし申候ま、此たびはせによも、斗りと
り候はんと申候さても外のよりはひくき直になん侍る廿
日廿一日などにはいでき候はんま、御人可被遣候
○たんざくを三折にして御會の當座に題くばりなどにた
んざく一枚つ、のけ候柳筥はいとくちいさき物に候長
なから或は百枚かさね千枚かさねてなど贈るには長くし
侍り其外何にても冠も鞋等もおき侍り心得給ん爲に申に
なん萬ちかくにこそ

つかかねの事

つかかねのこと少しおそくともくるしからず候よくよ
く開合せ見合侍ればつかかねは今いふ三方のことなり
まかしそれを粉にてぬりきらてふものを上にぬりて繪を
書たるなり心葉といふは其箱などのふたの中のほどに造
り花をさしたるをいふなり又折敷たかつきといふはをし
き高つきの上ののせたるなりそのをしきもごふんぬり繪
あり四角にふさをあげ巻結にむすびてさぐをしきの四角
の上の方に松の作たるなどを立るもあり高つきはむかし
は土にてしたるなりくばつきはくばく高つきはあしたか
く平つきは平なりさかづきあふらつきなどいふにて土器
なること知べし後のをしき高つきといふは高つきは三方

のあしのことく別にはなしてこしらへたるといへり昔はかの土の高つきの上にをしきのせたる成べしつかさねはかのつきの上に又かさねたる折しきのある故の名なるべしいときと通音なり猶このごろ御立の時のこし給ふ御ふみ御すみもきのふかもとゞき候てとりあへず返し申候とゞき候はんとぞんじ候よろづちかくとけふはいとくとりみだりたることにてかくなんかしこ

長うたの事

過し日二ふんじの御ふみ一たびにひらきぬまことにいとも打たえて侍りしを御ことなしと承りておちる侍りいづこもたゞいそがはしきには身ながらをこたり侍り二かたよりの御つたへも悦侍りよく聞え給れかしおのれことなう侍りされどいそがはしきのまして心くるしくてなんさるは御歌み参らせついでれもよく候ま、そのことわり申てけふ返し侍りこの十六七日頃に會し侍り物へ行てふ歌を懐紙にて給へ又倭文字が事聞給へてうれへ給へるさこそと覺申候よりて長歌おこせ給へりいづれもよく聞え候少しは筆くはへ侍りさるべき紙に書て給へ此ほどの御文ながらかの母のもとへ見せ侍りなんせめてもの悦にも侍るべきなり紙の色ははなだかくちばか又はうす墨にて染

などしてもよし同じ色をかさねたるもよし又にはほひなき色ならばうす墨に青をかさねなどせんもくるしからじ白もまたあしからじ長うたを一句くはなちて書事はなし引つゞけて書給へあとに短歌をつくるに反歌とも題歌とも萬葉に書ては侍れどもさる事書てはきとして女房のめかであしたゞ長きを書はてん所をば少しちらしても又上にて書はて、も少し反歌との分ちある様にさへあればよきなりこの十七日には當座にもはし書て有べし繪に水をくだきて水くむところ大道に雪ふるに車行山里に女あり男應ずる門にたてり（これは女の心にも男の歌になりてもよし）此分よみて給へ右の繪どもはこと多ければ大かたはそのよせの詞のみにてよみてよし皆よまんとしは歌があらわしくなりぬべしかしこ
細なる御ふみかたじけなくいよ／＼御さはりなくうれしかなん略さてはなかなぬほとゞぎすの事御志めしのごとくさる題いかで候はんやたとへたはむれにより候事とてもそれを證とすべきに侍らす思ふに是はいとねたみ候人か又はあしう思へるかたのさることを申してかへりて笑ぐさとせんとの事なるべしいひつたへん人もいかなる人にやその人／＼もかへりて心おかれ侍るなりむかしも檜垣

の女などに海の中にも鹿鳴はけるといふ下をしてこれか歌の上句を云本をよめといふに磯山のもみちのかけやみえつらんとか
いひ侍りし様の難事をいふ事の侍ればそれにちかき事なりなかな郭公といふはこなたより歌遣され候はゞはし書に……の所よりなかなほほとゞぎすといふ事をよめと侍りけるに心得ぬ事に侍れどもいなみがたくてたはぶれに杯様のはし書にて侍るべし今日講日にて人も來候ま、其事ぞ申候へばいとわらひ申候其内に一人が申は繪の郭公をよみたらば叶ひ候はんと申候げにもうつし繪の様をよみ給ひなんやさる事はまかしながらいひのがれられ給はゞ猶よくぞ侍らん尤繪の心の歌出來候はゞをかしく候はんとぞんじ候○までのたをさといふ五文字の歌いまだ覺え侍らす惣て歌の題は家定りて古來よりの題を明題部類と申書に集めて有之候其上類題拾遺は後水尾院の御あつめてあるとある題の歌によむべきをあつめ給へば上代はまらず後世はかの類題などの題にてよむべき外なく候尤今も新題出候は冷泉其外の家より出候へども當世決してさる題出候事には無之候間向後は左様の題はよまじき事の様は御申置可然候それともやむ事なくば御つとめて候ま、其ぶんに候へどもヶ様にたゞ／＼の事は御

くるしく候はんとさつし參せ候さて又しでのたをさの事は別に申入候もし／＼左様の事の古事あるなど申人の候ともさることはなくたゞほとゞぎすの別名に候猶ちかく申うけ給り候はんま、申殘候
正月廿六日兼題都早春當座春風春月春戀此三首も兼題のとき御よみ給ひなんやさてはこの春の何といふ題はつねのよみ様とは少し心得あることにて候たとへば春木春鳥とあらんに梅鶯を詠候ては梅の題鶯の様に聞え候ままあらぬ雜の木にて春をむすび又は梅柳など二本などを一首によみ入候へばかたより侍らす宜く候鳥もすゞめからす様の物に春をそへたらんぞよく候其如にて右の三首も少し心得かはるべけれども春風春月などはさのみ別物もなき事と候へば梅が香柳の風櫻の香など様の物をのぞきて外のものに思ひよせてよみ給ふぞよきなりされどもかたくなに申にも侍らす大様を中に候初春のうちに御よみ出し候へかし萬猶近に申候はんなり
八月十五日小會いたし候題は松間月に候御詠可被遣候先日の方にもよみ給んとならばわか方の兼題をばかけずよみて懐紙御出し候様にいたし度候御す、め可被成候
○此月のはすみ候へどもその當座のさぐり題にはかな題

をいだし申候古歌の一句をよみ入候事にて此度は拾遺集
雑秋の部の一句を二十句ぬき出し申候其内に

秋はてぬとは(本歌第四の句)やどれる月の(本歌第二の
句)右を二首御よみ可被成候宜きを一首いだし可申候ま
かし本歌の句あり所をさけておき候事に候右に有所かき
付候ま、月をば第四の句秋はてぬをば第二五の句に置給
ふべしかな題をもよみならひ置給ふぞよく候是にはいろ
いろの格有之候又古今などの戀の詞を一句つ、とりて四
季の歌をよみ四季をとりて戀又は雜をよむぞよく候又六
家集に勤句といふもかな題にて是はかなにて題を五七五
七としたれば五句の詞を得ては必五の句に置てよみ候様
にいたし候それらは六家集にて見給ふべし此度のは只本
歌の所にさへ置ねばくるしからず候おのれかはあしろに
ひをのと申にて(これは本歌は第四の句)

秋ふかきあじろにひをのよるの月あかでも見るか宇治
の里人」餘りに何の一ふしもなく候べとも書付御目にか
け候右あしろにひをのよると本歌に侍れば本歌の事にい
ひかけ候ぞよく候へども此語一ゑんさらぬ詞にうつりが
たく候又よるの月とつゞけしは無念に候さて又次てに申
上候惣てあしろは題にては冬の事にて是は本歌も秋に入

候延喜式を案し候に九月より十二月迄水魚を天子へ獻候
まければ秋の末のあしろをよみ候題にてはさてはあしく
候

○御うふやの詠など物がたり其外にも有べく候七夜など
のもあり候御心かけ置るべく候かねて心かけをなすをう
たをたしなむと申候みやおほきみなど神の御たねの様を
も又はきの國などの名所など引出ても有ぬべし後拾遺な
どに萬よをかぞへんものは紀の國の千ひろの濱のとか侍
りしも紀の守の子を祝ひ侍りし其外古今祝の七夜春日の
山に出る日といふも后の氏藤氏にて其氏神春日なれば出
る日とは天子の皇子なればいふなり何事もいそがはしき
ま書ちらし候かしこ

幸の字訓

さちあるといふ詞は日本紀の神代紀に兄ほのすせりのみ
ことはおのづから海の幸まし弟彦は、でみのみことはお
のづから山のさちます此のさちに幸の字を書て自註とい
ふに幸こ、には左知といふと侍りて海のさちは海のいを
とり釣するにさひはひありて生れ得玉ひ山のさちは山野
の毛ものかるに幸ひあるなり故に歌にさち人ともさつ人
ともかり人をいふなりさては幸は物のとこほりなく心

にかなふなどのことなればすべてよろしくかはらぬこと
にもいへり又さきくあるともいふ皆同じ心なり萬葉に
(卷一)「さゝ波の志賀のから崎さきくあれど大宮人のふ
ねまぢかねつ」と人丸ぬしのよみ給へるも近江の都は荒
侍にけるをから崎などのかはらすあれどかの大宮人のふ
ねは見えねばまぢかねつとよめり此度御問のうたのさち
ある春と侍るも幸ある春を待といふなり

たんざくの上的の方三分ほど置て題を書たんざくは三ツ折
のつもりにて上の折目へ半字かけて歌を書下し下の句は
下をひろくあけて書なり【貴人より題を書て給るときは
折目の下より書べし折目へ字を書置べからず題と歌とを
折目にてへだて貴賤をわかかつ心なり】名は上の句の終り
の字を名の二字にてはさむやうに書なり一字名ならば其
つもりにて書なり故に上の句の終の字も少し下をあけて
書べし

右のごとく上の句の末一句にても又一字二字三四字にて
も内へよりて書下句は上を一字下けて書なりされど下に
名を書時は一字さげぬがよしさげては名を書に下せはし
くてみぐるしきなり女房の歌に名を書事懐紙にてもたん
冊にても一會に女房數少きには名書ず大會のときは各名
を書付るなり是は諸家の説みな如此なり男子たんざくは

過にし夕はめづらしう御ものがたり聞えてなんさる後い
とくさりがたき事かさなりて心ながらいかに共とひ聞
えさせておろそかにや思すらん此ほどの御はなむけもま
いらすべきを何事も少しの心もわけがたくてなんいかで
御使りあらんをりだにと覺ゆるもいか侍ん道のつらの
所くなども其夕はまざれて聞えざりし先はこねよりこ
なたにては六合のわたりは玉川の末なりさらす手つくり
とよみしぞかし又大いそてふ宿はこよろぎのいそなり宿
の東のはしの所より南の海のはたを行ば岩どものいと遠
く海の中へさし出てえもいはずめづらしき磯あり其岩に
青う苔のやうなるはわかめなりけり磯なつむとよみしは
こ、なるべくたゞちに宿のうちに宿の西へ行過る磯邊

鶴 此殿の千世をわかよのたくひとや
千年友 なれきてあそぶともづるのこゑ、

にて道のと、こほりとは成侍らねば御のり物ながらよら
 せられよかし人／＼にもす、め聞こえ給へかしはこねの
 山の峠にたちあがりたる山三あり其内に四角にみゆる山
 を俗はふんこ山といふ是ぞはこの形なれば（ハコヤ）嶺とはつけ
 てさて外の二ツをふたご山といへり是も眞よりふたかけ
 この心にてむかしは名付けんを俗は二子と思ふ伊豆の太
 山はこねを下りて左りのかたなりするがの府中は古へ
 のあへの市なるべし萬葉に「やいつべにわが行しかは
 あへのいち路にあへるこらはも」とよめる（ヤツ）焼津南の方海
 邊の里なり大井川も日本紀にも出たり宇津の山の道は昔
 しは別によりさやの中山菊川などもとよりなり濱松の宿
 は阿佛尼のまはし住し所なりこ、は引馬の宿と古はいひ
 しなりひくま野は城の北に今もあり舞坂は東鑑には舞澤
 とありげに澤といふべき所なり此舞澤と新居の間のわた
 しぞ濱名の橋の所なり今の入江昔は水海なればそれによ
 りて遠つ淡海とはいひつさて其水海と南の海のへだてに
 一筋松原ありて其松原の中に道はありし其終りに水海の
 流れ出る所に橋はかけしなり昔はくろ木をわたせしてふ
 事さらしな日記にみゆ松原のやうは天のはし立の様に
 遠くはそく有けんさて今の新居はや、浪におそれて北へ

よりたるなり左のかたに昔のはしもとの宿は有しなり三
 河のみやち山は赤坂と藤川の間なりといへりやはぎは岡
 崎のはしのかたなりさいばらにやはぎの市にくつかひ
 にかん（い）線鞋のほそしきをかひてみやちかゆはんとうた
 へりさなけころもの里などは道の右の方にていと遠し八
 橋も右りの方にてたゞ田里なり今寺など有といへどいふ
 にもたらすよりて見てもあひなし二村山は三河尾張のさ
 かひあたりなるべし是より一めにはあふみのせたの橋渡
 り給ふ程にかた／＼の山など間給へ大かた人の知たるを
 ば是には書すこはたゞ見給ふことをいやしげなるをも何
 をもをかしても哀なるをも書給ん中に少し故ある事もま
 じらんはとて申なり

いにしへ大和の都よりは紀の川（吉の川の末大和と紀の
 さかひの川）を渡りて行しに妹の山背の山といふ二山は
 此川をへだて、有し山なりさて紀の路に入たつ眞土山と
 よみてまつちの山は紀の路にありしなり今は道のことな
 りといへばいづこいかなるともまらさ日御前（オホミマ）神崎なども
 紀の國なりいづみの國にも名所いと多し（みわがさきさ
 の、わたりとよみしを大和なりといふはあし、きの國な
 り）藤代はむかし亭子院か花山院か御幸の時より墨を奉

りし所なり岩代のむすび松は大津皇子の誓の歌にてよろ
 しき事にはあらずかなしき筋には用ゆべし紀のむろの湯
 は齊明天皇も行幸ありしなりこれらの事は仰られし歌ど
 もに残るべからずさて土佐日記は古風にてかぎりなくよ
 く書しものなればそれをもうつし又はかならず古風のみ
 にては女うたのことばには今めかすといふめれば源氏の
 さまなるぞよく侍りなん大和物がたりもことばもうたも
 よきものなり見給へかし

○濱松の宿の御本陣は杉浦助右衛門なるべし此もの、
 妻はおのがめいにて侍り御たいめなどはなく侍るべしも
 し難事も侍らば御心おかではせ給へかれは物もえ書侍
 らねば少しも風流なる事はまじ侍らすたゞ御ともの女房
 などの用あらんには仰られよかし同じ所の本陣に梅谷市
 左衛門と申はまことはおのが子なり是はよしなけれど過
 給ふ處なれば申なりおのれが生れし所は濱松の宿を西へ
 出はなる、所の右の山下にみゆる里にてむかし岡部の郷
 といひ今は伊場村といふ所なりそこに賀茂の社侍り五百
 年ばかり先にはりんしにて千石の知行に侍りし今は少し
 の御朱印なり

初めて歌よみ出しとてなん源清良（十二歳）のかたりしう

我宿の梅の花ちる春雨にまぬのにぬれて鶯の啼
 清良は長野鞠負の事なり
 宗武卿の御うた
 たのしま何にたとへん池の中の魚のなよきておそへるがこと
 眞淵
 かなな月のころ人に山つとにそへて
 冬たつやあらしの音す稚かもし山にも身こそやとしわひぬれ
 あらそめ
 えその海や干しまのあらそめな多みあらはれぬへき我思哉
 雪
 打きらし花とも花とちるものを雪とはたれか名付そめけん
 玄め
 むさしのはくまのいろく多かれと一もとをこそ思ひしめけれ
 湖上春曙（是より下四首は近體にならひて初
 うちの作なり）
 にほの海や沖には山もなかりけりさ、波霞む春の曙
 春戀
 おもかけな花にかすめてたとる哉一夜の夢の春の明仄
 後朝戀

待花

なみだ添生の下草わけわびの露しあればといひしなごりに
都にもことしはいたく風さへであらぬ頃迄花をまたるゝ

貴家に残きくをもてあそぶことは

ものさはおほやけにせさせ給ふちはやぶる神な月五日
のとよのあかりはきのふ過て今日猶うつろひさかりなる
にほひはすすべからずとてながしの川島なるおとゝ
にみこたち上たち部はじめてあけも縁もふりはへまさせ
たりあけはりうち敷のさま／＼みが、れにたるおとゝの
内にかゝやきゆるしゆるさぬ袖口のいろ／＼きよらなる
簾のもとに出なみたり庭は吹上のはま覚えられあるは千
さとの濱の岩ほを立清きなきさの玉をまかる或はけ遠き
本草故ありて植られ世はなれたる山水の心しらひ置れた
るなど目もあやなるにことにもえもいひしられざりける
ましてあたり／＼たてる白菊の物よりことにくれなるに
むらさきに匂ひたるはかさなれる袖にかよひさと吹わた
る風のかほりはそらだきの畑になびけりそれ我みかどに
菊をめで給ふ事は背によしならの宮の七よにもあらず玉
しき平らの宮の初の御代と申おほんときに始めて嵯峨野
の名に負ふ御惠の露ことのはの光をそへ田むらの御とし

ある穂むけのかたよりに此花になんおもむかせ給へりそ
れが中にことさやぐから國には黄なるをもてあそびそら
みつ大和人は白きをめづる事になんあるかの黄なるが心
ありげなるも今すでに見所なしこの白きがたゞなりげな
るも中／＼に初しもの秋をおきてめでよやすさめよやと
てあるじのおとゝ御琴あそび給へば人／＼こゑ打をへた
るは池の島山もうごき出川浪もはふれ来るらん心ちして
沖なる島の葉も求めず山路の花の下水もくまで更に千代
の命はのばへぬべかりけりまかあればいづれの日か今日
にまかんやたれの人かこの心をもたらんやとはとおふな
おふなまうし出せることばにいはいはく
開まゝによはひのふべき琴のねのをりしも通ふ花の下
うつろへばやまとにめつるしら菊にからくれなゐのいろもかれつ水
十一月一日衣ばこをひらきて人の見ぬたるう
た

冬遠情

神な月またも春としいふめればさくらいろなる袖やかまねん
立かへり今もみてしか遠つあふみ濱名の橋にふれるまら雪
雪ふりに白尾の鷹を手にすゑてむさし野の原に出にけるかも
みつかきのかゝれとしてしも昔より神さびげらしこの岡の松

藤原長衛

信 静

長 賀

高 豊

正 房

通 泰

周 武

大僧都寶傳

きしよりも思ひしよりもみしよりもほりて高き山はふしのれ 白ゆきのとほいにふれるおく山のさか木か枝を手折つるかも みわたせばあまのかゝ山敷火山あしそひ立る春霞かも まなのなるすかのあし野にすむわしのつはましたはに吹嵐かな いまもかも小島か崎に匂ふらんいもに似てふやまふきの花	神な月今日もいく度晴にけり時雨にけりといひて暮しつ ほともしなき日影ながらに晴れぬれば曇る時雨の数も知られず	夕日さす松の下露風立て又まぐるなり深山への里 甲斐かれに現と見えし浮雲の又まぐれき佐益の中山	ほせば又まぐれきにけりいく度かかざす秋も長からぬ日に いく度かくもりみはれみ山のほにまぐれて暮る、此ころの空	夕日影さすかと見ればやがて又木の葉みだれて時雨ふるなり	めぐり来て又かきくらす村まぐれふらで過ぬる空も有けり ひかげさす山のは出る一村の雲よりも又しぐれきにけり 吹まよふ風のまぐれのいく度か峯に外山に晴れくもらん 神な月晴るるとすれば行道にみの白衣ぬぐべくもなし 冬の夜は晴るるとすればまぐれきて月も光を定兼ねける こゝにはれかしこにくもり時雨行空のけしきも寒き山風 風はやみ外山の雲の夕日影さすかと見れば又まぐれ行 月みればはれまもあれど木の葉ふる夜は、時雨の絶せざりけり 長き夜の月にいとはぬ時雨哉曇も晴ん程しなれば 吹風の跡にたゞよふ浮雲の晴ればやがて空にまぐる									
源 昌、長	備後守廣元	民部輔藤原昌	源 信 益	橘佐芳時九歳	藤原長衛	信 静	長 賀	高 豊	正 房	通 泰	周 武	大僧都寶傳	源 元 知	橘佐芳時九歳

天つ風さそふまぐれば吹とぢぬうき雲ながら晴も定めず いこま山花も紅葉もなき時にくもりみはれみ何まぐるらん みるが中にかきくしりぬる小夜しぐれ早くも過て月ぞ残れる 嵐ふく山の高れに行かへりまぐるゝ雲の定なきをら 見るが内も定なきかな浮雲の晴るあとより時雨ゆく空	友 古 公 庸 同前	やましろ やまと かうち 同 いつみ つのくに 伊賀 いせ 長 信 静	正 房 民 子 實 傳 路 子 昌 長 枝 直 長 賀 伊賀 静
これも又いつまでか見ん村雲のまぐれて過し山のはの月 行かへるまぐれの雲は小倉山嵐の峰の名まへまだめず 村まぐれ曇みはれみ見る内にく度かはる山のはの月 山風に浮立雲のさそはれてはるゝも安く時雨ふるそら 風さそふまぐれにつれて夕づく日さしも定めぬみれの浮くも さそひ来てまぐるとみれば山風の吹より晴るゝ村雲のそら さだめなきたれか思ひのかよひてか時雨るゝ空の雲と成けん	清 子 呂 子 も み 子 同日當座	ひたち 枝 直 ○未正月當座 正月(若なを籠に入もてきたるかた) 同し題にて 二月(いなりまうでするかた) 三 三 子 白雲のかゝれる峯の松か枝に櫻さきそふ天のかく山 立まじる山のかひ有花ならば松に千歳のいるならへかし 【武田信玄のうたに似たり其うた「立まじるかひこそ なけれ山櫻松に千歳のいろはならはで」 同し ま も る	冬きぬといふばかりにやましるにぞふじの高れの雲はみゆらん さばかりにまぐればふらし小夜風の木のほやまどに聲をそふらん ひなよりもまつよりにけり紅葉葉の爲にかうちし宇治のあじろ木 村時雨ふるかとみしが打はれて残る木のはぞ庭にちりしく 花もなき冬の木ことの花なればいつみんとこそ雪はまたるれ 住うしと北の山へなたちつづくにしのみれさへまぐれふる空 ちりつる木の葉まからむ谷川の水はいかでか流れしもせん 黒かみの山も年ふる霜雪に老せるものと冬ぞみゆらん いつしかとあきみしまがき冬枯て菊の下氷氷初けり をばり 通 泰

ありし色をひとり松のみかはらすてかれはてにける野への寒けさ 妻とふとほたふみわけし鹿の音も絶てさびしき冬の山里 山賊は松きること年くれ業にもするか音の絶せぬ うき名のみかひなく立んとばかりを包にあまる袖の涙よ くれ竹のおのがよゝにばかひぞなきいひしことのは思出れど まろしなきいのりするまに稻荷坂みも松かえの神さびにけり いかにせむさしと思にもゆれども今はいふきのいふかひもなし うつの山人にもあはゝ聞ましを猶行末やいかにほるけさ あきらけき道をそのかみつふさにも聞ましものを老てくやしき 神代より弓矢は手にぞならしもつふさはしからぬ人やかならん	みかは とほたふみ するが かひ いづ さがみ むさし あは かみつふさ まもつふさ	高 豊 周 武 繁 子 俊 道 友 古 胤 満 茂 樹 廣 教 真 淵	枝 直 真 ち 路 子 三 三 子 實 樹 三 三 子 ま も る
--	---	---	---

山櫻あくまでもみん枝かはす松の常盤にちらじと思へば

おなし

り

松か枝に思ひかくれそ山櫻おのがいるかも春のときはな

四月(山田にさなへとる郭公空になく)

公 庸

いつよりか岡部の早苗とりなまし初ほとぎす今朝ぞなくなる

同じ

き

郭公さなへないそく聲すなり山田の田長間やまつらん

同じ

あ や 子

さつきまつ小田のまめ繩くり返し鳴ともあかじ山ほとぎす

五月(さみだれふるたち花さきたり)

茂 樹

五月雨のをやみだになき夕ぐれにもなつかしき花のかぞする

おなし

み ゑ 子

さみだるゝみきりに匂ふとこよ物いくよふるてふ事を問ばや

六月(川にはらへするかた)

と し 有

みそぎする御たらし川の夕風に夏もうきせも残らざりけり

おなし

ま け 子

火ぬきを引に心のすゝしきはあまたうれしきせにや有まし

七月(野に草花かほる)

高 と よ

袖はへて踊るをみれば花すゝきあだには人をまねかざりけり

おなし

み き 子

いざけふは宿にうつさん藤ばかりかま野べにのみやばきつゝみるべき

八月(海へに駒なべて月みるうた)

海 名

かくばかり都の人のたれかみし月かけ須磨の浦傳して

同じ

ぬ い 子

いざ今宵こまにまかせて月かけの明石もすまも浦傳せん

九月(菊にわたかづけたるうた)

闕

十月(あしろに女房たてり)

盛 英

あかてこそ日をくらしけれ宇治川のあじろの涙はかけて留れど

十一月(たかがりする所)

佐 芳

かりければ心もそらに成にけり天の川原の夕ぐれのゆき

十二月(神のやしろにまうづるうた)

枝 直

白雪のづきてしふればまさかきの色こそ埋めかやは際るゝ

おなし

おなし

ひとつもとさく

ま ふ ち

さふね山木々のまに／＼ふる雪をさながらぬさと手向こそせめ

枝 直

からの文はなべての人もとさくるを誰にか問んやまとふること

正 房

咲しより睡めてざらん七百代へゆる人もと聞につけても

常 樹

なそへなき露の蕙の深きをば我も人もと聞ぞたのしき

高 と よ

この宿をうときまたしき問人も時くる花のあればなげけり

千 陰

埋木と思ひし人も時くれば世にあふものをなにかうらみん

實 行

おく山の紅葉を分るそは傳ひとしと聞べきさほ鹿のこゑ

古 道

こひ人もとき黒駒のあしなみを頼めど遠き武藏野のほら

名 道

まかならで物思ふ人も時くればや秋としいへばなげきまされる

弘

きみな戀ともと聞夜の蟲の音もあるかなきかに秋ふりにけり

年 有

まちわぶる門に人もと聞ならばむれときめきてすべやならん

路 子

我心まらん人もと聞ならば千里行てもかたらばましな

與 野 子

祈るにはつらき人もと聞からにあふせなたのむ小はつせの河

佐 よ 子

山里の哀をしらですむ人も時くるからに秋はかなしき

も み 子

旅人も時くるからやながさまむ雁をみやこの其つてにして

り つ 子

皆人もときくればたにいそがれし月なかくしそ峰の秋きり

闕

なべて世の人もと聞わすれては我身悲しき秋をこそ思へ

久 米 子

うき人も時くるいるにならひてや時雨と共に我ふるすらん

美 幾 子

山里は問人もなし鹿の音をよひ／＼共と聞斗なる

清 子

そらことにこよひとかれてうき人も時くるからに夢やみるらん

山人もとき暮いそぐ秋の日は思ふ妻木やこりのこすらん あや子	ちぎりてもあいなしことの多き世に今年も水に驚のる聲 古道
思ひわび共と聞べき蟲の音もよほるぞつらき秋のこのごろ りよ女	いさなとり海はかしこきものぞとも馴るゝにあらぬあまのつり舟 佐芳
秋萩の花つまみてやさな鹿の己かかひとも時くれば鳴 古道	大日吉に雲かればやまかの浦のつりする小舟こぎかへるらん 枝直
時雨 神無月垣れの紅葉打敷て嵐の庭に時雨ふるなり 佐芳	沖もせに鱈つる舟日和をよみ海に幸ある程ぞまらるゝ 道泰
秋はいぬ神な月とや村時雨過ゆく空に木の葉みだるゝ 枝直	わたつみの朝なきなよみ見渡せばまばく浮むあまのつり舟 真淵
むらまぐれいくめぐりしてむさし野の草をみながら染んとすらん 道泰	鵜魚つる相模の海の夕なぎにみだれて出るあま小舟哉 長萬
いつしかに染し木の葉もふる事を成てまぐるゝ神な月かな まふち	楡にはきのふの秋も有けるをうたても吹か松の山風 冬の市 枝直
神な月嵐を寒みまくるゝは霞や雪のはじめなりけり 新嘗會 同し人	まかまた市女が笠にちりかゝる霞の玉に何をかふらん 荷前 おなし人
萬代に我すべらぎの神ながら神を祭らす今日の新たなめ 松のあらし 枝直	さきこゆる荷前のにのふ結ひたれ園ふりあるき馬よそひ哉 月影寒 茂樹
夜あらしなふせぐ爲とて植置てれざめさびしき松の聲哉 水鳥いつしかうとふ 高豊	さえぬともかくてこそ見ぬ庭の面の霜にふけたる夜はの月かけ ○當座

夏風 吹風の心は常にあらめ共夏こそ人のなつさびにけれ 眞ふち	垣夕顔 眞葉結垣れもたばに咲出てくれを争ふ夕顔のはな 枝直
若竹 今年又のきに生そふなよ竹の長き日あかす風のすゝしき あや子	おなし さきねれど人めもみえぬ宿なれや垣ほかたむく夕顔のはな 清子
野夏草 この頃の夏野の深く成まゝにふみわけ難き露の下くさ きく子	おなし 光ありとよそには見れど白露の契りはかなき垣の夕顔 りつ子
五月雨 まげり合木がけのいとゞはれやらで跡めわびぬる五月雨の空 弘	蟬 常弊なる松の木がけに鳴蟬やはかなき身をも猶たのむらん 一無
ほたる 天の川星の林と見えつるほなきさの草の盛なりけり 千陰	夏月 夏山のまげみわけ出る月がけに秋をさそひてわたる夕風 三重子
郭公老 老か身のいこふ事だになき世には郭公こそうらやましけれ 眞ぶち	おなし あつさも忘れて向ふ夏の夜は明やすき月をいかにうらみん 胤満
夜水鶏 短夜にたれ待としもなき宿を更てくひなの驚かすらん にほ子	夕立雲 よそに見し高間の山の風はやみやがてふるべき夕立の雲 正房
照射 聲立ん秋もちかきをますらなが岡へのともしさゝてあらなん 海名	六月はしめ 今日のみか来ん冬も又みそぎして心にまらぬつみはのこざし 枝直
刈麥 ふく風の夕すゝしき草村にひとり時なるとこ夏のはな 古みち	海邊戀 いせ島やみるめもからぬうき波のかゝる袂ぞくちはてぬべき りつ子
おなし 紅のこぞめのいろにいでにけり誰とかはせしとこ夏のはな 年有	岸松 としをへてたつ川浜のあらへども縁はあせぬきしの松がえ みき子

千代かけて日かけのかつらかさすなり岸のひたひに生る松がえ	同し	千	蔭	り	つ	子
あはと見るあはの島山海こしに晴る、緑の色ぞすしき	海眺望	路	子	に	ほ	子
めぐりきてせきの清水に影みればまらぬ旅人に逢かとぞ思ふ	旅人	正	房	よ	の	子
もちの目をきのふとかへてけさは又人つとふなり四のいちくら	市塵	公	庸	も	み	子
小はる田の坂田の橋をなはたの坂田と誰か呼初けん	橋	枝	直	す	か	川
山守の木の下水をむすひつゝすます心は夏もふられし	夏寺	と	し	有	美	つ
ときはなる神の社の楠葉も夏は猶こそまげり合けれ	夏社	弘		子		
たらしれのほゝその杜の下風はすしきもの、昔戀しき	杜	高	豊	り	よ	女
萬代もかはらぬ春に神風やいすゝ川浪立かへるらん	河上春	路	子	み	系	子
水とく春の河水流末ののどけさまるき風渡るなり	久米子大井山城守母公			ぬ	い	子
春ことに吉野の河やおもかげのかほらぬ花の鏡なるらむ						
すゝか河いくら八十瀬の年波はこゆともたゝじ水とく春						
末近きをき長川を見渡せば霞をかづく春のには鳥						
すゝか川八十瀬渡りて行末も遙に霞む春の曙						
とし波のよるにまかする川そひの柳の糸は絶る代ぞなき						
玉島やこの川上にいくかへり千とせの春も若ゆつるらし						
とし波をふる川の邊の青柳のかみも縁にかへる春風						
水とく春の山川日にそひて限りなき水の流れをぞみる						
老の浪立よる川ものどけきに千代の初の春はふるしも						

いく春をふるの川波立かへり縁かはらぬ杉の下かけ	み	き	子	在	滿荷田東麿
春風にひもとけわたる川水や千代結ふべきはじめなるらん	き	く	女	あ	さり
行水の心のどかにかすみつゝよどの河へは春めきにけり	八	代	子	君	か
春くれば心のどかに行川のみぎはに遊ふ千よの友づる	清	子		き	み
水とく春のはつせの川水にときはの松の陰ぞみえける	元	子		君	か
たらしれば春くるごとに谷川の苔の色そふいはほなるらん	峯	子		の	す
君が爲今日そつむなるせり川の水の行へも千代のふる道	の	ふ	子	も	ろ
春風に川せの水打とけて又立歸る千代の年浪	玄	け	子	も	ろ
松にはるけき年をちぎる寄若菜祝言	眞	淵		と	も
のどかなる南の海にまづ生るいそなは今日の千代祝ふため				も	ろ
ちぎり有ときはの松の春山に君ぞみてまし十かへりの花				と	も

みどり添松にちぎりて萬よもいやさかゆべき春ぞたのしき
み つ 子

萬よに君ぞかざらん行末を猶長月の白菊のはな
路 子

今日ちぎる君かさかえのあひに逢て千よに千代添み園生の松
けふよりは君が千年をしめし野に若なつむべき春ぞ久き

盡せじなもみらぬ松をためしにて萬代あそぶ宿の松風
玄 つ 子

○澗松院殿七十賀

秋の祝

澄 道光明寺

ふき上に立る白菊つきせじの秋を眞砂の敷によまばや
かさしては千歳の坂もこえぬべし山路の菊の花の盛を

ことなきを吉田の里にかる稻の千よの年有人ぞたのしき
吉田うしのは、刀自の七十の賀に秋のいはひて
ふ事をよめとあるによめる
眞 澗

みくま野の浦の濱ゆふ君か手にまかす秋の風になびきて

○何がし六十の賀
松爲久友
淳 明内山傳藏

七十の後もいく千代露霜をかされて句へ白きくのはな

ともなふも久き代々の名にふれとおもはばりせぬわかのうら松
廣 通石野平藏

七十をふもとになして千代もみん君かこゆべき山のみちらば

年ふりし契りかばらぬ影の松今行末の千よもともなへ
義 正宮部孫八

秋ふかき山路に匂ふ白菊の千代の盛を君こそはみめ

ちぎれ猶老をわかへて六十よりともなふ松のいく千よの陰
義 直同人子

袖ふれていくよの秋のかをとめん老をへだつる菊のまがきに

つきせじな六十の老の行末も共に千年を松のことのは
萬 女同人妻

折かけし梢のにしきあかにほにさかえてあませ萬よの秋

盡せじな六十の今日を初にて千年を松に契る齡は
若縁たちそ不和かのうら松にともなふ千よの末も頼もし

つきもせずいく十かへりの花の色を初に契る松のことのは
とことばに松の心もむつまじしなともなふ千代の齡かされて
榮えゆく末やいく千よいくもとの松もともなふ老のことぶき
保己 一稿勾當

共なひて千代の齡ものばへまし心なくさの濱の松かえ

さかえ行松のときはにちぎり置て友に千年の影をならべん
清 子

ともとみん六十の後を思ふには猶うら若し和かのうら松

吹あけの濱べにたてるそなれ松なれつゝ共に千よをへなまし
源 昌 長

友とちば千歳を松とふる人のむそぢばかりは數ならぬかも

むさし野にうらべてつみし初わかなわかえん事を正しにぞしる
神山の若ばのかつら折かざし節おもしろき祭なりけり
大 僧 都

末遠き齡の友と隔からに松てふ松をむつび置なん

たち花を玉にぬきつゝしる人のおぶやとこよの手ふり成らん
はるみ 村田春里子

こと、はゆきには有ども千歳へん人の友には松をこそせめ

かきつばたすれる衣を今日ばきてくすりかりにも行んとぞ思
千 蔭

末遠くちぎり置なんわかかの浦の百枝の松をふる人にして

かつしかやたづらのいなぎいくそ秋おくつみとしなつみかぞふらん
枝 直

ほかへせぬ縁の色にとまなひて千代立なれよ松の下かけ

よるつ代の宿にとこよのたれうゑて千枝の橘霜にいやてる

遠長き年へん松を梓弓つるにたぐひて友とこそせめ

冬遠情

女 房

いばかりすまの山里冬さびて柴といふもの、烟立らん
山に水くむもりに木のは落るうた

宇 萬 伎

我をめす君かみ祭に夢さめて松にあらしの音なきく哉
この二くさのうたは真淵のなり

今日もかしわけて行らん大きそやなきその山の峯のまら雲
紅の飛きもの神しましならん旅行まらぬ君か行えな
○山下部高豊

庭津島あめにはふりて音に鳴犬じものも雲の中にほえた
るてふことはまめくしく耳とめつべくもおほへ侍ら
ざりしをはたひそかに思ふにやつがりがこのひとことも
初より讀事をえるものならんや賀茂のうしの吾國の言の
葉の本だつふるきふみの心ばへを教へ給へりけるをかし
こみていたづらなる腹に味ひしかばや、あきたちばなの
うましもの、心もえつべくなりぬまからずば今の代に生
れてあがれる世の言のはの様をなしてかつくも心に思
へることのをばへてんやかくてぞけたもの、雲にはえけ
んたぐひに似げなしといふべくもあらずかしこ、に八と

せさいつごろ萬葉集をなんよみならはせ給へりけるそ
こはかとなくて春秋をへにつ、おのれさきくもあるかな
ことしほと、ぎすなく五月ばかりになんよみ終れること
を悦はひてうしをことほぎ参らせらるあまりに侘みだるひ
なの言の葉をおしまつきのもとにまひらす
ますらをがとり負鞍にもるそやのぬためもおし爪やり
しためしの如くなほくあるみ代にしすめばほこらしきこ
とは聞ともむらきもの心うれしくこまつるぎわすられが
たく世中のたのしくあればあきつしまやまとの文をほと
とぎすおのが時ぞと天ぐもに音鳴がごとくをちかへり見
しあきらめしにひばりのあがたのうしはふることにつば
らかなりと世の人の行つとへるを去りそめて去たひ参り
て去、じものをがみふしつ、こと、へばうしはゑまひ
てたらちねの母のみことがうなづきをなでしがごとくち
、のみの父のみことが、ろひき教しがことよこなはる
とひのまに、名ぐはしきはりまなるてふいなみ野のい
なみもやらす年のにはさとし給ひしまきく、のさはなる
中になら葉の名におふみやのつゆしものふりにし時の
宮ぶりもひなびもかねてまめこともやさしきわざも千々
といひて四にあまれるくさくはつくばの山のもととえげ

みおくがもえらすおほふねの對馬のわたりわたなかのふ
かくし有ばかりつぎいひつぎくれどあきらめもさとり
もかねて千年まりながれてこしをいにしへの野中の清水
くみわけてもとの心をすゑの世のかたりにせんと菊ごも
のみだれし筋をまつたまきくり返しつ、世の人のかざし
さすべくかうむりの詞の花も久かたの海士の磐舟のりか
けりそらにみしごとたかくみしふかく見しつ、か、なへ
てさだめ給へば今日よりはあらたまりつ、玉かづらたゆ
ることなくまなびつきかたりつぎつ、萬代にたどらしも
のぞいにしへの道

返歌

ふりにける奈其の都の宮ぶりも今の代のことおほゆるかし
萬葉集よみならひし初つかたえもわきまへがた
かりつることを思ひいで、
からかりし難波のみつめあらしほしかつぎなれにし身こそやすけれ

源の實行故郷に歸るを送ることは

みな月の末つごろ實行のぬしがふる郷にかへり給ふと聞
えければひと賀茂のうしのたちにつどひて人々馬のは
なむけをなんしけるそれがなかにうしをはじめておもふ
とちとり、歌をよみて首途を祝ひかつは名ごりを惜む

いかでこのうたのともこ、ろはらにこたえざらでやとて
よしゆきのぬし

家にまつ妹はあれどもむさしあふみさすがに今日の別
れわびしも」となんうたひ給ふけりこ、ろ時になひ言
ば古へにかよひておもしろくめでたきことになんおほゆ
さればうたげさかりもして日も夕ぐれにおよべれどやつ
かり歌はとみにいでくべきにもあらずまかぬしとやつ
かりと邑のつらはことなれど國しおなじうしければ名ご
りもこと人におなじからんかはいかで千々の思ひのひと
つをもとてことながくなんふるきまらべをうたへるをお
くれながら参らすめり、「いそのかみふりにし里の家さま
ついてもがめをほり出立て君はいなんと玉ぼこの道のみ神
にしづぬさにゆふとりつけてとこのべにいはいへをすゑ
みこしなるかへる山路はさきかれといつかすみればこま
つるぎわれも行まと晝は日のつくるもえらす夜はよのあ
くるもわかすほせれどもあしたみわたり行路のおそき心
をますらをと思ひ頼し年月をくひの八千度とりがなく東
のくにの甲斐にある駒にもがもあらがねの土をはしら
ん久かたのそらにかけらふたかじものつばさもがもなそ
らだにもかけらんものをつばさに身に生ねばおくれ

居て手をわかれんにたゞときにときて贈らんとかなす
つるぎの太刀もこゝにしもとりしかねばせんすべのた
ときを去らにあま雲のそらをや君がおもかげとながめし
をらん其そらの秋こそ戀し秋さらば雁こざらめや雁さら
ば君が玉章かくるやとはかなき空を明日よりは今日か今
日かとふる郷のいもがまつごと我はまたなん

反歌

おほきみのおほみだからぞと山かたにまぐはもてほるいもかりゆかすよ
夜くだちてなくちこがことひるまだになかよ我はなごりしなしみ

五月詠郭公うた一首

ほとゝぎすなれがなく音はさみだれの雨にまじれといち
じろくふりせぬ聲の去たはれていつか聞んと春されば花
をまつごと夏さればさく卯の花の下露に夜は立ぬれなが
めつ、誰が里にかも玄のひ音をもらしけらしとねたかり
しこころくねりもとき、ぬのみだれもなきぬ時もわかす
いやつぎ來ける雨はやむとも

反うた

小みだれに袖はひづれどほとゝぎすうらめづらしもなほもなかなん
おちかへり鳴ふるせりと人はいへど我はいやましにあはれとぞきく
つのかくの長柄のはしのながらへて世にし住すばよこも

又うたはうたさん

りのいかいか岡のいかにして春の立日に吹といふこちこ
せ山の玉樟にほへるきみが眞玉手の玉手もゆらにかい
やりし文をもみめやわぎも子がさつきばかりの若玄の、
玄なへるがことよきたへの手志てなでけんきたへのま
くはし緒を今日のことかきかづかめや文みればめぐしう
るはしたへみればやはしかぐはし夢にだにか、らましと
は思ひきや思はざりしをうつそみに着てやならさんまめ
ごとかまさなしごとかわらはへもきこえかはせる命てふ
ものにざるらしかくしつ、いのち死すばますらをがあた
をやらふとなくるさのみつはくむまで我はるまはん
これやまは雲のかけはしまかと思ふふみみてしよりこゝろそらなる
にきたへのあやめを見つ、みつはくむまばく老をのばへつるかも
海月なすたよへる身はいはがれのこゝしききみを頼むべらなり
かはる世のなか空になくほとゝぎすと口ずさび
つ、こゝろをもなぐさめけるほどもいつしか去
年にはなりぬさればさとのりの國の去るべには郭
公をこそたのまるべけれ
とゞけよやこの玉づきをほとゝぎす其くとくちのはなのうてなへ
袖の露手むけの水とつけてもよ空ゆく月はめぐりあふらん
源誠正の大人師走ばかりに七十ちの賀し給ふけ

みて参らすめる

七夕のうた

をとめ子かひれふらすらんこのゆふべふきくる風のそよ
さらにてらすともしのひかりそふ五の糸のいとながく秋
をかけたるほし合のたへぬ契の今も猶いく萬代の古言に
我ことのはも書たすと筆を落せば竹の葉にまなくひまな
くふるあめも心しふらなきみ來ます夜は

反うた

ふるとてもあふせやたがふ天の川雨にあすてふちぎりならねば
あら玉の我としのはを敷れば五の十とふる郷をいでにし
比は五月雨のふり分髪をとく櫛のはを引がごとこよろぎ
のいそにぞ生ぬうば玉の夢てふものもかくばかりはかな
からんやはかなくも過にしかたは久かたの空に去られぬ
白ゆきのかしらにつもりわたつみの波はひたひによりも
なすあまの衣手はすいとまあらぬさまとはなりしかど心
はすてすくちははつとも

反歌

吉備にあるあら山ま金ほらばはれ名に預つるぎれらばれりてん

中の秋の三日ばかり荷田のうしとみに身まかり
玉へりしと賀茂のうし聞え玉へりしかばこはそ
もいかにぞやと心もいといたくうつくわれか
もわかずされどとむらはまほしくてかのたちに
まどひ行道すがらくぞ覺ける

次の日葬り給へる墓どころにいたりて

きみをこゝに送れる野への蟲よりもまさりて我はねに鳴れぬる

八月十五日の月のあかきに荷田のうしを思ひ出

千鳥

ながむればいと物こそわびしけれ在りしにも似ぬ秋の夜のつき
おきつなみななくさの濱の濱千鳥涙立ればや鳴音きかせぬ
とほきみなみちにむかひ給はよにことなる所
くを見めてたふひなんもの、猶とて東の都の
かた書るひらをを参る別れ参する老の心のうち
はいかでかいひもつくすべき

吹上の濱によすてふわすれかひわすれやすらんなれしみやこな
きのちなる眞土の山を君こえば同じ名にしも思ひおこせよ

○谷興準

東より歸ける日難波のみなとにてよめる
百づたふ五十のうまやはすきぬれど猶ほるくの船のみちかな
日毎ふるまゝに家にかへりつきぬうからやから
出むかへたるに

石竹

海山のつゝみもなくて家人のそまひをみらくうれし
なでしこの花のそまひを今朝みればあはれうそてしものにもあるかな

寄弓戀

ますらなの手なれの弓もたわすれて忘れがたき戀もするかも
ありはての世とはまるく人の身の千年をかけてなに思ふらん

述懐

やまぶきの花のさかりをみてしより小島かまきはわすれしもせず

山ぶき

あし引の山にも野にもうるはしき春の廿毎のくるらくをなしも

暮春

かりかれは天の月わたる秋の夜のさやけき月にあまの月わたる

鴈

あさなく朝いせしかど朝かほのまきぬるころはあさいせなくに

槿花

月のおもえろき夜

黒髪のおもえろき夜
紅葉のちる木のもとに駒をひかへてたてたてたかた
もみちばのちる木のもとにこまとめて待おる舟はおそくともよし

菊

新戀

いのるかひなからましかば初瀬川身をなげつべきふち求めてん

○佐芳(于時九歳)

かれ行小野(九歳童)
いつしかと秋みし草のいろくもかれゆく小野の霜のはつ花

竹雪(同)

移らへし竹のさ枝のかすく千よをかきれてつもれえらゆき
としのはて(十四歳の春)

こん春にあふ坂山は有ながら行年とむる關もりぞなき
年のはじめ
あらゆきにうもれし草もみんそめて春はきにけりむさしの、原

上略
何がしに答る文(右同とし)
さてはおたきわたりのをば君よりの御ふみみせ給ひうつ
くしきふところ硯筆墨さへとりそなへて賜はせける御心

ざしいはんすべもえらすなんあるをさらば其三の品をよ
み入てれいのえせごといと母とちにはげまされ侍り
て

佐ほひめの霞そめなすりごろもたちぬふてをばから
ずや有けん」又御心ざしにむくいてはぎ参らすること
ば

たまひてし硯の海に筆そめて千よませ君と書やそめま
し」と申度候かそいろはも同じ心にかにもねもごろに
つたへさせ給ひてよと申せとに候あなかしこ

同人十になりし時舟遊に出て

行水に舟を浮べてあそぶ日ぞ世をうし島と思はさりける
かくはよみし十ばかりにて世をうしまといへ
るは似つかはしからずとて眞淵は悦びすと
り

○すが原昌齡

御いへ造り出玉ふべきあらまじきはまり給ふや瀬河の君
御かみのかたえこらせ給ひて又御つはねに引こもらせ給
ふとむすめのいひこしぬいかばかりにかと心もとなふ思
ひ給ふるこのほど心得たる樂もあらばとおほせこされた
り入門の酒歸飲えるしある樂なれば調して奉りぬ御脈も

見ではいかいと思ひながらいなみがたくてこそ夏夏ころ
もむすめに給りぬそれに染られたるうたも申こしぬ
夏ころもかさぬる神のふかみ草はづかにあらぬめくみ
とをせる」此ほどの御ふみかへしまいるかしこ

法眼の君御もとへ申給へ 菅原昌齡上
返し法眼の君に聞え奉る 清 子

今参りのほどはたれもくたらはぬことのみにてむねふ
たがるものにこそと思ひやり聞ゆるまゝになれくしき
ことも侍りきさるを父ぬしのもとにしもいひやられける
とよおもてあかむこ、ちし侍るぞかしおと、ひもけふも
御もとまで細やかに聞え玉へる詞さへ歌さへいとをか
しうあかすくり返し侍ると思ひつゞけ侍る
いくとせを猶かさぬとも夏衣中にへだてはあらじとを
しれ」あなかしこはづかしげなるわたりになまねび給ひ
そや

これみ給へ

昌齡のもとより桃の花を贈給へるとして
うめの枝のやせもまそきて桃の花のふとくこえまといはふとをしれ
みちとせになるてふも、なかさされてはかそへもつきぬ春とこそみれ
又上はそのまゝにて下

みそよつよの花とこそみ

こは算はかせのよめらんやうなりいづれにか
さだめ侍らん

あまたの花にもきぬのいろにも紙にさへ桃いろ
といひてうす紅といふ人のなきはこの花のいさ
をしなるべし

ものいはとはましものをのがいの世に名たるとあるやしらすや

すかはらの萬三十四上

返しけにあえものけしうはあらずかし

かれにけるもれ木のえだもはしき花にあえてやわかへらまし
やま人のめつてふ花を手折してぞ盡せぬ春なきみはかぞへん

桃いろとて人のもてはやすはことわりと思ひ侍
る中にもこはたぐひなくこそめでたけれ

むべし世に名たゝる宿の花なれやこゝらめなれしいるにしもにぬ
おほやけごと御いとまもおはしまさじを御かへりこと
こまやかに聞え給はりさ、げよみ侍りぬれいの年より氷
もあつうさむさたへがたう侍るをさはらせ給はで悦び聞
え奉りぬ人のおくりたるいさ、かなるいを奉りたるにあ
つもの、あつき御こたへはかへりてはぢ入侍りぬ遠きさ
かひのつけもの給りこ、にはまれなる物にてうち置ずた

うべ侍る

なくさまで過る心もきのくにのなくさのうりになくさ
みてまし」かしこ

返く待遠なりと聞え玉へる雪のけしきばかりうち

ちり侍る山つくるばかりふれかしとねぎ侍るなりみ

つ子を御むつましきものにおもほしたるありがたう

侍る心おこしせで仕へ奉れよかしとねぎ侍るになん

かしこ

清い子の君の又御返し人々申させ給へ

すかはらの萬三十四

きよい子をとひ奉る文

この國にうまれてこの國の文かく事はたれもくあるべ
き事ながらそれさへあがりたる世の人には及ぶべうもあ
らずまいて人のくくの文書人はむかしもまれなりしに物
部のうしの末の世に出ものしてこの國の人ながらたゞち
にもろこし人どひちをまじへてものがたりせんやうにあ
なたの文をかきはじめたるは天つちひらけはじまりては
唯ひとりとぞいふなるそのながれをくみつたへたるはは
たをりべのうし太宰のうしといふなる又はたをりへのう
しの文の道かきつたへたるはあまたが中に長かずの君を

又清い子の君にかへし奉る

あるかなきかにきゆとのたまへて

たへて猶千年をもへよ空さむき霜にもかれぬほなもあるよぞ
すがはらのまさとし

夏ころもかきぬる袖はうすかれとこしとやいはんあつきめくみを
へて

又なてしこのかたあるさげおびといふもの給へ
るよしき、て

つころの法眼御もとへ申させ玉へ
すかはらの昌階上

十三夜赤井のきみの御もとになが月のまふさむ
やといふ事を首ごとの上におきし

なにしおふ半の秋の空よりさやけさよまる長月の影
かぜさむみ衣かりかれ長月のよわたる月の影に鳴なり
つれに見る月の光もわきて猶こよひはすめる秋の夜の空
きりこめし空も晴行秋の夜の月にのこれる新の松かぜ
まくものなしと云けんおぼる夜の月よりけなく長月のかげ
ふくる夜をてらす玉かとおく露にやどりてすめる長月のかげ

ぞいふなるそれうせ給へるはまことに世の中の寶のうす

るなり一文字をだにひかすまめむぎのわいためをごにま
らぬ人のうするさへはかなき事にいふなるを此はをしみ
奉るもあまりあり

いかばかり油のぬらんおく霜につらる、枝のかたえかれては
清い子のまたちの御もとへ
すかはらのまさとし上

返しみつこのもとへあへらへ聞ゆ

御ち、きみの御もとよりおふなくとふらひ聞え給ひう
つすきにし人の上をしもめいほくあるさまに聞え給へる
はなきがけもおもたゞしうあまかげりてもよろこび聞ゆ
らんかしと思ひ侍るにもいとややるかたなうお、ほれ侍
りていらへ聞ゆべき事も覺え侍らすなんさるはいさ、か
かいつけ侍るものそに見給ひてさりぬべう引直してか
しこに奉られ給ひてよかしこ

霜がれの菊を折てむすびつく

大かたにだにをしみ聞え給へるをまいてか、る
なからひにておくらされぬるなげきは御少しは
かりにも猶あまり侍りてなん
かれのころかたえも霜にむすほ、れ有かなきかに滑つ、ぞふる

さかづきのめぐるにつけてうき秋も忘れて向ふ長月の影
むしのれもつれよりことにすめる夜と庭に聞ゆる長月のかげ
や、更るよはのまとあゝの千代かけて秋ともなはん長月のかげ
すはまにさ、れたる

をみなへし秋のたもとにかくるらん鬼のしこ草立し置ては
いづれもく思ひめぐらさではやりかによみ出
たれば敷おほくても今様歌にてわろく候玄賀子
がもとより稻のほにつけてこしけるうた

うすくこくいればいろどる秋風にみやこもさそな夜寒なるらん
野の花の秋の千ぐさのいかならん今日あかりし野分すぐさば
黒木の御とりゐのあたり思やり聞え侍る

みつ子の御もとへ

○ためなほ

貴家に十月ばかり残菊をもてあそぶ詞

山上のおみのかすまへあげにけん秋の花のとりくは
つしか時うつりてうらがれの小萩夕べの鹿もとはずなり
尾花か袖あしたの霜をはらひかねたりひとはなのこるな
でしこ塵をだにすゑじとみはやすべくもあらず白露の心
置れし女へし森の下草の老をくねり誰がぬぎすてしふち
ばかまなつかしきうつり香もなしやあさかははつるのみ

大君のみつぎをいそぎまづのめの老もいとはず秋田か

るなり」又道のほどはるかに行て日もくれなんとするに
大なる川あり水鳥あまたむれゐたり何といふ川ぞと里人
にとへば是なんとね川なりと答ふ

水とりの羽さしかはしとね川の波にうきねの夕わびし
も」其ほとりととまりて明立はまもつふさの國に出あが
のりたる馬のつなとるをのこちかく雨ふりなんとといふに
いかなればさいふと問につくば山にねろのか、れば必三
日がうちに雨ふるといにしへよりいひ傳へ侍るといふを
聞て國人にかはりてよめる

あすにかも雨やふりなんあが國のをつくは山にねろの
か、れる」この人の詞に雲の事をねといへる山に侍り

社頭松

神さびて岩れこらしき此山の松もいくよの年をふるらん
○飯田民部卿明夫

冬のはじめあづまよりもうのぼりけるみちすが
ら瀬戸川にてよみて馬つきより東の志たしき人
人へ遣しける

鳥がなく東の別れ身にまみて川かぜ寒し瀬戸の曙
花を給りしかたじけなさ侍ふ人々までよみて奉

かれのこりてまがきにまつはり秋風立にし日よりうらみ
なれし真くすも今は霜の下にかひなきさまぞしたるひと
りこの七くさの外に秋をおきてうつらふからのまされる
匂ひはたゞに見ずぐし給はんやとてかしくくめでさせ給
へれば今も猶多みさかへたるませの志らぎく吹こす風も
寒からずしてとけわたる霜の下露に老せぬ秋をちぎらせ
給ひ久かたの星のかすくかぞへつきぬためしにもこの
花をこそとて侍ふ人々にも打かざ、せ給へりければたれ
もく霞にほえけんけだもの、たとしへおぼえて千とせ
の坂もこえぬべくよはひのふべきさかづきとりくめぐ
り萬代かなづる糸竹に並りけるとなんそれが中にめしあ
げられしにはあらでこの事を聞て何の命婦とかやがよめ
る

千よの秋菊の下ゆく谷水の末くむ里にすまんとぞ思
ふ」かみなづきといふことを句の上にして同じ命婦
かけていはみのはかりもなにかせんつゆも千とせのきくのことのは
○藤原朝恒

秋もや、くれ行ころにむさしの國さいたまごほり和戸て
ふ郷の稻葉のはそき道を行にこしもふたへにかゝめるお
ふなのいねをかりてをりけるをみて

る 明 夫

おほけなく君かめぐみの深き色をあかでそめつるとこなつの花
前栽にさけるとこなつの花を折せて給りける人
の元よりあかでそめつると聞へ侍りけるかへし

清 子

夏の雨にまはれし花もことのほの露のひかりに色ぞ添ぬる
かならずと契し人の雨ふる日ははること有とて
問ざりければ

うぐひすの繼てふ笠もあるめるを雨には人の問ぬものかは
返し 支節の祖父八十五まりの頃なり
小山 玄 信

文このむけに宿からやまく梅の花はまたなきにほひもそ添ふ
○満存

山吹露

人のうへに思へば露も山吹のいはぬ色には心置らん
おのづからなひきあひたる枝寒み結びも留ぬ山吹のつゆ
暮春

花鳥の春しとまらでくれ渡る空に霞が團はあれども
いつとなくまがひし花の山くりに雲をのこして春ぞくれ行

名立戀

うしや我蟻のすさびのいつとなく人めつ、みをもれて立名は

中にあれば外にもれ行ことわりをまりてたつ名の如何にくるしき

切戀

いつの世の逢瀬なるらん思ひ河泪の淵に身をまづめても
こひしなぬいのちぞつらきおなじ代にすめばそ人のうさもまされ

寄玉釋教

てらせ我衣の中の玉ならば心のやみのはれぬ迷ひを
みるからに心の玉もみがかれて涼しくうつる池水の月

○高津いなは

あかつきにとけて逢戀
いれひもの人はもよふすきぬくに我はとかれてあふばあふかは

○澄道和尚

秋戀

心なき草木も露の秋風になびかぬ袖よいかにつれなき
早苗

冬月

霜を吹嵐の庭の月ふけて淺茅に氷る影の寒けさ
かしらおろして後初て伊せにまうで、

鶯告春

千 蔭

影よわる夕さびしも尾花ちるまづくの田居の秋の夕ぐれ

季 鷹

泊瀬山ひはらなつたふかねの音も霞に咽ぶ春の曙

鳥の名十

同

うかりつるみをしわすれて夜もすがらとひさしときをさしきまのびつゝ

賀茂の川水終

うぐひすの木傳ひならす初聲に柳櫻も春やまららん

○俊之

更衣

花染の袂もけさはたちかへて匂も夏の衣きにけり

曉郭公

誰爲そ此あか月の一聲をまくらにもらす山ほとゝぎす

湖五月雨

目をへつ、晴間もなみの五月雨によるべや迷ふ志賀のうらふれ

曉水鶏

横の戸をたたくくひなに短夜も猶あけやすき曉の空

忍戀

人忘れすいつかこえなん逢坂の心の關のかたき月さしは

右五首鳥丸中納殿御點

妻におくれて日敷ふりゆくまゝに有し世のこと

心にわすれずせきくる涙のやるかたなげれば

なき人のいひし言のは露となりよなく袖をなどぬらすらん

わかるともいかになげかじくやむまじまらぬ昔の人と思はれ

思はじと忍びながらも思はるゝさき立人の有し世の事

曙夕うた合

景

雄

れざめして思へば遠しものこしの吉野の山の春の曙

荷田在滿家歌合

十二番歌合 寛保元年八月於荷田在滿家

歌合といふことはあがりたる世のすさびにあらず宇多の御門のおほん時ばかりよりこそ世にもてあそぶこと、はしければならぬ葉のふるごとこのむ翁のむかし心にはをさなく心おくれたるわざとも思はれしにやをさをさ判せられたるも聞えぬをたゞ此荷田家歌合一卷の吾師のもとに残りとゞまれるはめづらしきことになん此外には誰か家にいつ判せられしとき歌合もたえてあらぬなるべしこたびそ、のかす人のありてとかく物せんといふおのれはたあしからじとこたへてやかてそのおくに翁の家や吾師のもとやなどにつどひて人々のよめりし歌どもに翁すなはち筆とりてそのよしあしあげつらはれしらをもとりそへてかく思ひおこしたるは文化といふ年はじまりて七とせにあたるとしきさらきの二十日に今二日三日おきてのこと此はしかき物して板に系らせたるは懸居翁に歌のこと、ひきかれし錦織齋の大人その大人を吾師とはたのみてよろづとひまなふ泊酒舎のあるし清水濱臣なり

題

故郷萩 寄月戀

作者

左方 源信恭 紀恭忠

楓里 喜世 通泰

右方 辻子 菅子

在滿 紀量 友古

判者

賀茂真淵

一番 故郷萩

左勝 源信恭

花のみはもとの心に咲にけり野となる里の庭の萩原

右 辻子

小萩さく秋きてみれば故さとにふりせぬ花の深き色哉

野とやなりなんなどの心詞をとられてさるべく聞ゆ右のうたはふる郷にふりせぬ花のなどいふあたりすこしをかしくも侍らめと左は萩のよせたしかにはへるべければ勝とす

二番

左持 源方江

離みよと咲出ぬらんとふ人もなき故さとの花の萩原
あればてゝむかしにかはる故郷もしとの心に萩はさくらし

右

左のうたはたれ見よと咲出ぬらんといふはいつもものことなから故郷におきて感なきにもあらざるを第三句以下いとちからなく聞ゆるなり又落句に花の萩原とはべるは花の梅かえ雪のふしのねなど、近世よむ人も侍るを實陰公などはいかなるもの、いひそめけんなどこそそのたまひしかげにさることぞかし物語に花のゆふかなともよみしは車のすだれよりすこしさしのぞかれしかははせをいはんためなればそれをもと、思はん人はくちをしかるべしふじの白ゆきなどいはんは上手めかざるなどかしかりてよみそこなへるものなりさて此歌萩の縁語もたしかならねばせめて秋とだにいはまは侍れ

三番

左勝 紀恭忠

なにとなくゆかしき色の深草や野となる里にほふ萩原
故郷にたちかへりみれば萩萩の花は錦と今は咲けり

右 菅子

左何となくゆかしき色の深草やと侍るは風勢なきにしも侍らず右錦をきて故郷にかへるの心かすかにいひよせたるはしかるべきをすべてはいひふりにたるまゝにて侍るをや左もさしてめづらしとはあらねどもすがた右よりはまされるなるべしにほふ萩原は萬葉の古詞めづらかによろし

四番

左 楓里

野と成りし里の萩萩咲頃は朝の床に小鹿ふすなり
野と成りし後はなしかをあるしにて昔の庭に萩は咲ける

右勝 荷田在滿

左の歌萬葉集にうつら鳴故郷とつづけたる歌とも侍れ

はうづらは故郷のよせ鹿はもとより萩のよせにてこと
わりはよくいひとられ侍るめれど事多くわづらはしく
すがた少しおくれで聞ゆるにや千五百番歌合に鳴のふ
しどに蛙なくなり侍りしをも判者の心ゆかぬさまに
かゝれて侍りしなり右の歌をじかあるじなどをかし
くむかしの庭に萩ぞ咲けると侍るも感情ありて聞ゆれ
は勝とす此歌すべて此巻にてはすくれてや侍らん
五番

左持

喜世

此ころはふる郷人も咲萩の花にさびしき萩やなくさむ

右

紀量

あれはてゝ宿は跡なきふる里にうみて見しよの花ぞ残れる
左右ともにふる郷の意はたしかにあれど萩はきくにも
とりかへられなましとおぼゆ且左は體はゆるやかにい
ひなされ右は下句はよろしく侍るべきを是又一二の句
いづれにても一つにてあらば萩の縁語もおきよかるべ
しとおぼゆめり勝劣なきものならし
六番

左勝

通泰

咲ぬやと小萩をとへばふる郷は小鹿しからむ萩の野なる

右 友古

あれにたるまかきかもとに鹿鳴てふる郷さびし萩の萩原
左發句胸句おもしろく下句にいひくだしたる意氣も可
然を句ごとにつままりにたるこゝちするぞ今少しおも
ふべきにやともおもはるこれはよきがうへの論なるべ
し右二三の句は源氏物語に鹿はまかきのもとにと有を
とられてをかしく一首のしらべもよろしく侍るを今少
し萩を賞したきこゝちするぞやすべて山家の趣にしひ
てふる里のことばどもをいひつけたるやうにも侍れば
左よりはすこし劣れりといふべくや

凡故郷に鹿をよまんこと寧樂は姓氏録の春日氏のこと
にも見えてむかしより鹿多かり高圓芳野その外やまと
は山所にていつこにもよみならへること多きなりさら
ぬ私のふる里にても山かたつけるわたりにはさも有べ
く侍らぬともあまりかずくになればあきたきこゝち
ぞするされどもおのれくか歌なればいはむかたなし
これは右一首にいふべきにあらず

七番 寄月戀

方江

ともに見し月はその夜のかたみそと思へばいと影の身にしむ

右勝

友古

たのめつる人はこのよの秋かせにはるゝもうしや聞の月かけ
左歌ともに見し月はいふはありつることなるにかた
みといひ且影の身にしむと下句におかれて今見る月を
もおもはせたれどよくいひ得たりとおぼえはべらす
又下句ことわりをいひとほらんとかまへたればのびや
かしも侍らず右はるゝもうしやの句猶おもふべく侍れ
ども一首のさま左よりはゆるやかにとゞこほりなく聞
ゆれば勝になすらふべし
八番

左

恭忠

よもすかられられん物か戀衣かたしく袖にやとる月かけ

右勝

在滿

人はたゞうほの空にも見ん月を夜よしといく夜たのむはかなき
左歌身にかたしきたる袖に月のあなちにとめてやど
らんこと心ゆかず侍るなり右歌月夜よし夜よしといふ
本歌によりて下句のよろしく侍るにや
九番

左勝

喜世

月かけは我思ふ人の何なれやなむるたひに戀しがるらん

右 茂子

今はかく涙にくもる月かけを夜よしとたにもしつかたのまん
左大空は戀しき人のかたみかはいふ歌をよみうつさ
れたり且ながむるたひに戀しきといは、月見ぬ時には
おもはざるにやとふと見ゆれども只月のうへにていふ
ことなればさまでは思ひいたらで見るぞ歌の道なる右
今はかくとおかれしは下のいつといふにむかへたるよ
ろしきをその意は今待ばかりの契りにもあらねばい
たづらにかく涙にくもる月なるをいつか來べきほどの
なからひになりて月夜よしと思ひたのまんとおもふ心
は聞えて侍るめれども初五文字あまりことすくなくや
すべてすこしいひたらぬこゝちするなり左は古體をこ
のまれてのびやかに侍れば本歌により過したる難ゆる
して勝になすらふべし
十番

左 信恭

右勝 菅子

思へ人涙にくもるよなくは月さへ袖にとほの恨を
かれはてし人の備たちそひて月すむ萩ぞわひしかりける
左の歌月さへ袖になど侍るはをかしきをかたるさま聞

なれたるこ、ちするなり右落句はふるめかしかれど月
すむ秋ぞといひ入たるあたり切に聞ゆればすこしまさ
りたまはんや

十一番

左持

楓里

右

辻子

くもれたり来ぬになれぬる心からよしとよめ月ばあやなし
しげした、月に思ひをなくさめてほるけんよほの心ともがな
左歌こぬになれぬるなどよろしく右歌いとせめて思ひ
入たる心あはれに侍れば詞つかひすこしおぼろしくし
きさまながらえこそおとれりともいひがたけれ

十二番

左勝

通泰

右

紀量

秋にあふ涙に月はくもる夜も其面影の身をぞはなれぬ
板まもる月はへたての間のうちに契りても見ぬ人ぞつれなき
左歌そのといふ歌ことわりはさることながら聞よくも
侍らすあきにあふなどはよく居て侍るべし右歌板間も
る語用なし第三句は發句よりうけたる事ながら下句に
いたりて人のねやの中に来ぬとやうに聞ゆるはつたな

荷田在滿家歌合終

きこ、ちぞする左まさしく勝ぬべし
ことのほよしあしいはんは春秋のけしきをあらそ
ふがごとしおのがじ、のこのめるさまいづれをよし
としいづれをあしとせんそれことわる人はたその心
つからいへば終につくせる定めあることなしされど
も柳櫻ははぎす、きのくらふべくもあらず菊紅葉は
花山吹になすらへんかはことなる物にいたりてはた
れかわがざらんその花もみぢが中にも芳野の里よく
見ん人は龍田の山たちこえにたるおもひこそありぬ
べけれおろかなる心には露霞たちまとはれていろめ
もわきがたかれどこれは花もみぢ世にちるべきなら
ねばとて露も心おかたなすわざになんゆめ山かせに
なしらせそや
賀茂真淵

文政七年みな月江戸にてうつしぬ

甲斐鶴寸

同十三年うつき十日あまりいつかの日うつしぬ

三井正之

さき草

御答

御示拜見門弟衆之歌不宣との事從來拙者常々申す事に御
座候其内に只一兩輩又は女子などには大概宜しき有之を
此度の連歌之中千蔭兄の外はとかくに歌不調常々世話い
ふ事なり後世歌を非と心得る迄に成候は一段の事にて自
己の歌の調ひ候事は扱々かたき物と被存候福雄は甚深志
之人なるにいつもく歌わろく惣て萬葉を取るには随分
心を付け候て聞あしからぬ詞をとるべく申合め侍れど兎
角によく承引せぬと見えて時々萬葉の中のわる詞を取り
候人多し近年は其事は餘りにいひ退屈して捨侍る程の事
なり尤一首の首尾の事は一人の拍子による事と見えて兎
角にぬけめ有る人多く候也美樹は歌はとかくに不好と見
えてさまざまいへども出精なく但し學事はよほど才有る
人なれば其方を賞候なりとかくに歌よくよまでは皇朝の
古學には不足有之故す、め申事なり

枝直君

真淵

彼一卷漸野意を注候ま、返壁仕候頃來別而損氣に而心
事も違ひ候様に覺え候ま、非なる事ありなん御ゆるし

さき草

たまへ

美樹 福雄 眞言 千蔭 枝直
○歳の暮に梅の花を見て
昔宿の梅咲にけり年のうちにもとくひすも来つ、啼くなむ
（さき草） 然にかへたるおもはしからず
新なるそのふの梅のはなみればふる年としもおもはざりけり
あらたなる梅いか
春た、ばかざさむものを梅さけどまつ、あるなき年のくれ哉
としのいそぎか今少し心ゆかず
年のうちに咲きとしさける梅の花はるの色香とおすは思ほむ
おもはんいか、されど萬葉にはかく様にもいひ
つ

今更にはるなまためやまら雪のふるとしかけて梅さきにけり
さも有なん
いとやく今年くれぬと梓弓はるかたまけてうめのはなさく
枝

冬ふかみゆきふるなりいざさらば梅の花笠きつゝあそばむ 福
 末の言どもいかにぞや
 歳もやくれむとすらん降る雪にあらそひさけるうめの初花 千
 あらそひさけることばたらぬが如し 枝
 新玉のとしのまはすになりぬらし沫ゆきしのぎ梅のはなさく
 おちゐて且おもしろし
 ○春の初に鶯なく
 かたやまのまげ木の枝にあさらす鶯來なくほるたつらしも 福
 一枝などあらんが如く聞えていかゞあらん 眞
 朝日かげかすむ大野にきてみればななくぐひすの鶯ぞ存なる
 本のかた猶も有べし
 おしなべて世は春なれや鶯のなくこゑきげばのどけかりけり 百
 きげばと有にむかへて二の句の心たがへり 千
 鶯のこゑきしより世のなかの人のこゑはうらなりけり
 猶有べし
 別殘すはぎのふる枝にうぐひすの鳴く聲きけば春きぬらしも 枝
 はじめの句なくてあらばや
 ふゆこもりはるさりくれば朝日出に鶯の音をまづぞきける 美
 はじめをみふゆつきとあらばや

かつしかの野のべの雪もきえなくに今日こそ來なげはるの鶯 福
 はるのことば聞にくし
 朝日さすかたやまきしのまつが枝になきてうつるふ鶯のこゑ 千
 かくも有なん 枝
 鶯のなくこゑきけば宮びとのそでつけごろもほるたつらしも
 三四の句心ゆかず
 春をあさみまた雪さゆる野づかさに鶯の音ぞのどけかりける 美
 末の句猶有なん
 ○遠山にかすみ霏微
 打摩きはるさりくればまなが鳥安房のとは山かすみたなびく 千
 一わたり聞えたり 枝
 武藏野をふりさけみれば秩父れにはる日かげるひかすみ棚引 眞
 いかゞ侍らん
 朝夕にみさけんやまの富士の嶺を春のかすみの立かくしぬる 美
 霞をいとふもことによるべし
 夕日さす雲井にみればさがみれのはこれの方は霞あひにけり 福
 雲井ならであれかし又夕日より箱根は遠きが如し
 うらくと春さりくれば足びきのとほやまのほにかすみ棚引 眞
 初の句わろし

猿澤のつゝみにたちて見わたせば紀の路の山にかすみたな引 百
 紀の路はよしなし伊駒山か 千
 かさかぞふふたら高嶺にかすみあてあづまの國に春立にけり
 志かりなん 枝
 朝にけにみれどみがほしきころものをつくば山にかすみ棚引 眞
 たなびきとむる心かひくとては二の句といか
 が
 さ衣の小筑波みれを見さくればならしこのも霞みこめぬる 美
 心は聞えて志らべわろし
 天雲のそきへにたてるかみつけのほるなが嶽にかすみたな引 福
 此ごとき山などは道行ぶりに見ん時はかくもいふべし
 かく設てよむには今少しいかゞおぼゆ又上の雲なくて
 あらばや
 右二十九首

さき草終

うめあはせ序

水鳥の賀茂のあがたぬしの翁鳥が鳴東の大城のもとにていにしへぶりの歌學び起されしより其道をしたふ人さはに出きにたり此翁の學び子の中にもはぎ園の大人にしごりの大人ことにすぐれ給へり其外何がしかのぬしとてとり／＼のぬしたち愛の國かしこの國に聞えたれど今此江戸の古ぶりの歌人といふめるは大かた此兩大人のながれになむありける爰におなじ學びの友がき新むさしの國かつしかの郡平井里のくすし松本恒雄ぬしとしごろひめ持たるうめ合の一卷はかの翁の仕へまつられしやむごとなき君の殿にていぬる明和の二とせといふとしの春母やの放出をはらひ催させたまひし歌合の書にて恒雄ぬしのおばの尼上此殿の奥によし有て時々まゐりかよひなどせられければ其比うつしおかれしとなむかゝるめでたき一卷を人玄れぬうもれ木となさむも口をしければ板にゑり世に歌はさむとて其の故よしいさ、かおのれに書てよと乞はるゝにいなむべうもあらずかくて此一巻の文の詞よ歌のすがたよとり／＼にけだかうみやびかなりやされどいたういにしへぶりがればかへりてたゞごとのやうに

見む人もあらめどそはいろをも香をも知る人ぞしるべきわざにこそとまれかくまれとし久まう冬ごもりせし此うめ合の今より春べと咲出て世中にかをらん事のよろこばしきあらましに我つたなさをかへり見ずて文政七とせといふとしの正月大石手引しるす

むすめ千世書

うめのこと葉

大かたにうめの花といふがなかにいしへは冬まけてさくめるまろきときさらざばかりにはふ紅なると二つなん聞えたるをちかきとし比となりて百つたふ數もまらぬすいたくいろことなるこそ出来にけれまかればかれをめでこれをもこのめる心／＼につけて若き人／＼のあらそふめるにさらば此花あはせをせよとてなんその日に成ぬればもやのはなち出をはらひあけてをとこをみなかたわけて數さしのわらばへ左はれいの紅のこきうすきをにほひかさねてしあかいろのかざみすそのはかま右は青色のかざみにいろ／＼かさねのきぬく、りぞめのはかまなどなるべしさてとりならべたる洲濱どもは足ゆひうちしきのいろあひよりはじめてあるはゆるぎきたるあるは

今めきたるおのがまゝ作りにつくりこのみにこのみなさしめうつしぞいはんかたなきかくてとり／＼にあらそひくさ／＼にことわるめることばども、こよなく心ゆくわざになんされど後の世にあるさま／＼のうめどもの一はな片枝などはいひも出べうもあらずたゞみやびてゆゑよし有げなるにこそたれも／＼めをとめてけれそれが中に柳のかつらしてさかづきにうめをうかめてもたるかたはたれかうかべしてふ心ばへこれにむかへて冬木のうめにゆふをきぎみて雪多くふれるかたはそれとも見えすてふさまならん左のかたうどはあまりにすみ過いて見るめなしといひ右のかたうどは月をはなれざらんはうたてやあらんといふさだむるひと古の萬葉のふることはまことあるうたげとみゆれどけふは女がたのむしろにはふさはしからず右のこまかなる事をいはずうたへに心高き歌をうけてまなせしはとてかちになんしたる又黒はうを山にて松ふかく立たるくまに梅のかつ／＼みゆるにとほやますりのかりぎぬきたるが行さまなるは闇にこゆれど、おぼえちんを岩ほとして鏡を水なるにこきうちきの袖を

の、くまにかすめたるなど夜の心ばへこよなくこそとこわりぬことばをいればかちかたのらんじやうにきは、しうなきいで、空はのとやかにかすみたる夕ばえ廊のかたの打出しにてりあへるをその、鶯もはるかにこゑ合たるはいつのをりかはまかんさてやうやくにことまづまりぬれば月も高うのぼりぬ

呂子

はあれどくらぶの山のかをりをこの焼物してかね花はも

うら、かにかすみの衣空にたちて柳の糸の風によるめる比こそあらめいづれの花にも先だちて久かたのあられかしましう雪心ぼそうつもりはてつ、世もたゞ冬ごもりにたるほどをひとり氣色たちゆく梅がえはいづこのとくまりそむる春にか有らんか、るあやしげなるまがきにもいろ香ばかりは世にもなるべくかくてさかりの久しきだによまた寒かへる空の雪にやなどみだる、もあかぬわざとのみおもへど誰にかはいひもあはせん世の中の春にあひて時めかしきわたりにしあらばむべもめでたうもてはやされぬべきをたゞ谷のうぐひすのなかやど、のみなれるを春の心すすみにてなん侍りきさるは遠近わかぬ下風のいかにかはさそひけんめでもう出来給ふ人々の珍しきは

なにかはしくもの、あらん谷や柳やをりにつけたるよそ
はひとものつや、かに匂ひたるはにはめる袖口のみ見な
れしそのふの鳥もおどろきなんかしか、る所にはけふこ
そげにから衣春の名もおもほゆればいとしく嵐の風も
うしろめたくかぎりあらん事をのみぞ今は心くるしうお
もひ侍りてなむ

花らんちのちのかたみにつきすなほ人のたもとの香をもとめよ
けふまではひとこそとへうめのはなあすきへちらばなにかこたん

木々、
益 子

久かたの空のけはひよりはじめて萬のこと々もはいふべ
くもあらず老たるも若きもほどくにつじてもとりの
きよらにあらたまりぬるはるのいつのとしよりも長閑に
覺ゆるはこそそのうるひ有つるゆゑをるかりけるあまた
うゑならべたるうめのこなたかなたさき出たるそが中に
もうすくれなぬこそこと木にはまさりたりとて誰もたれ
もはしちかう出でてめであへりかばかりにはふこそえをこ
そ驚もとひぬべきに雪深き谷には春ともまらぬにやなほ
いかなる方にやどりやさだめつらんなどいひくつて日敷
ふれどもそはおともせで久しうとはざりけるともだちま
できて

谷の月に冬ごもりせし鶯もまづまるかたのはるをとふらん
とあるにかへし

うぐひすのこゑだにうときわがやどの花もけふこそ春をまらめ
咲たるうめのなどこそとなへられつ

千世子

春のいとはやうのどかなる儘に野邊の遊びこそとてたれ
かれ引つゞけてそこともいはず行めぐるにをちのいづく
ともなくうめが、のしけるをわがみにくればなどいひて
玄たひつ、ゆく山かたつきて岩根の水をかしうながれた
るが打はしなどあやふかれど車をばとめてかちよりわ
たるや、ふかく入もて来れば同じ小柴もよし有てみゆる
物のうちに人げもなきに何かのれうにや折たる枝などわ
づかにありをちかた人のゆくりなれどうめが、にはさ
そはる、ものかといふにえすぎやらでなんひとえゆるし
給ひてんやとわらはしていひ入さすまばし有てにびいろ
のきぬの下には山ぶきがいうつろへるをきたる竹のあ
み戸をやをらひらきて出くるは尼のすむがてしならんと
覺ゆされどまひなしにはといふをきいて

世のなかをうめてふはなはかすめどもかなる軒ばの名のるなりけり

無 名

ちかきわたりにいとふるきのうめのそこらはひわたりて
よにことなるがあなるを見んとてさるべきとち行に其ほ
とりにはわらはへの多くつどひてわれこそみちのまるべ
せめとぞほれつ、あらがふめるほどにさそひがほにもか
をりくる風はおのづからこそまるかりけれか、るかをり
すべうおもほえぬほそきたづらのみちを過てあやしのそ
のふに、ほへれば花こそやどのとまづおもひ合せらるめ
ぐりにすがいしわたしてこ、かしこにたゞうがみ引ゆ
ひつ、をこなること書すさみたるものあまたひらゆふし
てかけらんやうにみゆるはうたてこれなくばとこそおも
ほゆれその木だちはをろちのもこよふらんさましてむく
つけくも有をそこらひろく遠くはひわたるに枝しげく所
所たちたるはかのそびらに生けん松がえをさへふとおも
ひやられ侍りされど花のこちたくさきみちたるは雪のた
かうつもりぬるかとおもほゆるにかをりの世のつねな
らぬこよなさに何事もわすれてなんみるすてさくらこ
そめでたきかざりとおもふ玉へながらかなん此花にはま
かざりける久かたの月の夜さりぬば玉のやみのうつし
もたとくしからず又うら、かなる日に紅に、ほひかさ

ねたるなどは衣のかたにすらいまめかしうおぼゆ枝こそ
こはくしうむくつけきもの、ひぢかやめたらんとみゆ
るはにくきものからからめいたるもさるかたにをかしか
らずもあらずあるはやんごとなく心ことなるおまへにも
あるかなきかのところせまがきのうちにもへだてなく
さきわたりなに心なきたちえもところからいとさまぐ
にみなさる、などおもふにえならぬ春の心すさみにな
ん

もみ子

うめの花にはふはるべになりぬればまらぬかきほをとふもとがめす
なそもかくうめに心のうかららん鶯にしもあらぬものゆゑ
もるともにはなむつる、うぐひすはおもふどちとぞいふべかりける
おほかたは春なつ秋冬によれるみそのふにはたうめのさ
くらのとことわきてうゑさせ給へるもぞあるあら玉の月
日のはじめに事たつ御急ぎなどやうくはて、との、う
ちのどやかなるに白きもくれなぬもいく千もとしもなく
さきわたるほどになんうめてふ木のはなはもとよりこと
さやぐ國のものぞとてこなたをはおとしおはしめて山も
瀧もかしこのたゞすまひになんせさせられたるみちて
さかりなる比御あそびあるべきにて其日はとくわたらせ

おはしましぬか、るかにはまかせたらんこそをかしから
 めめなれたるたもとのかをりはしもならはへそとのたま
 はするめりしあしこちからまわりよりあはれにおもほゆ
 れなどによはぬ人もなくてたかうみやびたる御心おきて
 ははなもおもひぬべきわざになんなどさるべきおもとた
 ちはいひあへ侍りぬおまへわたりよりひんがしにしのた
 いわたどのかけたるすの青うあたらしきうち出しのいろ
 いろきちやうのすそのくさくさなみたるこれのみも春の
 はじめのもの見になむあるさるは左みぎりの汀よりたつ
 とりさし出して一わたりあそびをばれ、ばけふのことと
 る人御はしのもとにわらはめして中島によろしき枝折て
 攀らせよと仰ごとあればみどりのゆはたすぬかんばかま
 下は紅梅か何かうるはしうてはるくくと明らけきまさご
 にもたちなれたるさまにあゆみいきてかの舟にむかひて
 いふなりかねてやまうけたりけむあかいとおほしきわ
 らいすがたのよたりひだりみぎりとわかれてくれなると
 去ろきうめによにおもしろきえだをおのくさ、げもて
 奉るをみればてふ鳥なりけりやがてその枝のはしを折て
 かざしに給はりてたちわかる、を物の音のまことりたる
 はおもひかけぬもの、なみだをさへ落しつべし日かげう

らくとはれてよろづのいろにほひあへるはまばゆきば
 かりなるにかせいさ、かわたりてうちもともみちかをり
 かつはとびちかふめるたもとにちりか、るがおもしろさ
 いはんかたなしもの、音どもいつよりもあらべ合ぬる心
 ちせらる、をうすうかすめるかなたのうぐひすもこゑこ
 るちかうつり来つ、すゝろに鳴あひたるはわれおとら
 めやおもふなるべしはて、入ほどにあかき青き細長に
 かつけさせ給ふを立歸り一をれまふなどそゞろさむくな
 んおもほゆかくをかききこはいつをかくらべむをこ
 もをみなもからのやまとの思ふふしを残すやはあるひと
 りもたするはにくきわざにやとの給ふにかやかくして
 いとゞこともゆかす
 から人のそでおもほゆるうめか、はやまとにもあらぬこてふこそとへ
 とし立なばかすみが關をはやもこえなんとまたき霜雪の
 中より待たりしをほどもなうて春にもなりぬ今は立出て
 見れば四方のけしきのびらかにつねにみる川邊の松もめ
 づらしうて道の行手もいそぎいそがぬこ、ちしつ、殿に
 いたりぬ君たちのみけしきまことにはなにもをさくお
 とるまじうみきちやうすこしへだて、をかきし花がめに

智元 尼

紅梅のいとうるはしきをさ、せておもと人達のさうぞき
 たて、つどへるも花をこきませたるにあやしきまでかを
 りあひたりおまへの木たちともみなうちけむりて池の水
 にうつりたるさまあはれにみゆるをましてみはしのも
 との梅こそ雪かあらぬかとおほめかしきまで咲みたる
 はことしよりよろづ世ふべきなどなへられつ、こよな
 くなつかしうおもへば歸らん家ちをもおもひたらすはる
 の日のながうとゞまりぬ野ばなればやわかうどたちの
 聞らんも何かはとて

みえたるなど誰か心のとまらざらん
 春來れはうめの花こそ世の人のこゝろさきみのげめなりけれ
 をりをわき時をしるめるも、木が中にその、うめまた冬
 ごもりてふくめるほと花にまがへてふれる雪さへをか
 うおもはる、をいとはやうひとつふたつひもとき初しよ
 りかをりは谷のうぐひすをしもさそひ出てうひこゑの聞
 ゆるいとうれし夕月夜のおぼつかなきに吹過るのきのつ
 まさとかをりてなつかしき追風はおもふ人をもこてふに
 にたりされど過にしかたの思ひいでらる、こそわりなけ
 れ又雨などのそぼふるあした紅なるがいろも香もにるも
 のもなう咲出たるこそいとへある心ちすめれ
 あまきら不雪のうちより来る春をまのびにうめの香をまらせける
 紅の色ふり出る春雨にかすめるつゆのにはふ梅がえ

外山

喜よ 勢

さゆり子

としつきのうつろひ行ことを人の身にはさやにおほえ
 ぬ木くこそわれはがほにても春の梢なむけふりあへ
 りけるまいてうめの花こそふりみだるまで雪の下よりし
 もふくみまけてまだきより春の心をうごかしぬるもめづ
 らかなるに此さかりにかをりあへるをりばかりにるもの
 やはあるさるは谷の戸出らん鶯さそふまをるべをよろこび
 あるはそこはかとなきかせのつてには思ふあたりのよす
 がともなり道ゆきぶりにそでふる、人の心もえんにおも
 ほえあやしの山がつかきほにおもひかけぬ紅梅のほの

いつしかとめにちかきのきばの花もひもとけそめ袖ふく
 風もや、さむからぬばかりなりぬれば人の心もうら／＼
 とものし侍るこそげに春のそらなりけれさるはかすみか
 をちの野山にもあくがれぬべくおもふにいたづらにをり
 過ぎなむが口をしようておもふどちのもとにかなたこなた

ものするにかせより先にとこそこ、にもおもひわたりつ
れおどろかし聞ゆるうれしさよなどいひおこせ侍りしか
ばひと口ふつか過るほどになん先かをり多かるといふ所
にかいつらねてまかりたり山里なれどゆゑ有そのふもま
じりてこ、もかしこもうめのはなのいろをあらそひわた
りたれば春風のふくもふかすもたゞかをりをわけて行な
る山人のつま木おひたるさまなども花のかけには奥ふか
くむづかしげなるまづがやどりにもたびねせまはしうち
るまでをみんなどそゝろによび出ぬはなかりけりおも
ふにはいとはやう時うつりて夕づく日の花のとはたま
されるさまなるにいとたつことかたうこそ

うめの花折だにとらじかくばかりかをれる袖を家づとにせむ

梅のなが歌ならびに短歌 浦野

久かたのあまざりあひてふりみだれ冬ごもりせしうめが
えにふくめる花をえら雪はつ、むとすれどひもときてか
をれる日よりうら／＼と霞棚びき吹かせやつげにけらし
もうぐひすも谷のふるすをいつしかと出てしなげばおも
ふどちたもとふりはへそことなくあこがれつ、もかをり
とめこゑをえたひてかげろひのもゆる春野にゆふづ、の
かゆきかくゆきけふもくらしつ

かへしうた

うめの花さけるあたりに吹かぜばそでさむからぬ物にざりける
うめのはなをなつかしみ来る人か友としなれよ野べのうぐひす
うめのはなをよめる ませ子
よいふれどかばらでにほふうめのはなたれとりそめし人ぞゆかしき
うめのはなをよみ侍る せい子

かたりつゝくらぶの山のうめの花ゆきてみるにもまさりこそせめ
真淵主集玉ふ男かたの文并長歌短歌 加茂真淵
うめのことば
ふる事ぶみにみえずして萬のこと葉の文に載たる鳥梅て
ふ木の花は虚見つやまとの國のものにしもあらずことさ
やぐからのくによりなむねこじきたれりけんそのはじめ
をおもふにおしてや難波のおほみ時に今は春べとさ
くやこの花とよめるてふ歌はすべて春の木の花をいひ
てうめをよみしにはあらずたゞとぶとりのあすかあらた

への藤原などの宮の大御時よりこそこのはにはよみ出
たりけれまかありて後青によし奈良のみやこをまきませ
るころしも筑紫の大みこともちの家につかさ／＼をつど
へて梅のうたけをせしことはありて同じころなる東のさ
きもりが歌どもよますありつるは始つくしに植たりけれ
ばあしこにも多くしてそのこと猶あづま、ではいたらざ
りけむことをもえるべきなりかくて百の大御代をかさね
千々のとしをへにたれば國々のほてまでもみちわたり里
もまみ、に咲さかえつ、白きはふる雪なす袖も見るがに
ひかりあかきはてる日なすおも、たへまじきまでなむ

かゝやけりける今はまかしもさかゆるといへども其もと
から國の物なるたゞすまひのえるくして枝もかたくなに
かゝまり花もくるしげにかじけたり久かたのあまざる雪
の下ゆかをり出て鶯だにもえらぬ春邊を告ぬるなどはを
りにつけてめでたきに似たれども大かたの世を思ふに春
はさき夏はまみ秋はおとろへ冬はこもれるこそ天の道の
常にはあれひとりのみ時に先だてるはかたくなにしてお
たひならぬわざになむある櫻の春のみさかりを待てには
ひみよしの、よしの、やまにのどかに咲みてるには梅の
かたえを折てかざしぬば玉の暗部の里のえるべとする香

ばかりはた、へぬべきよしもなむなきことをもてことさや
ぐ國つちはよろず心せばくしてちはやぶる人のこ、ろ
もてなせる道のかたくなしきま、にみだれのみありてこ
さしのつたはれることもなくそらみつやまとは國つちの
ひろくして天津道のまに／＼をさめませるより千五百代
も平らかなるをえるべきなりげにかぞけあしがきをと
ひ来るいみき稻ぎの主たちはすべて此心をえりてあだし
國ぶりをばこのますなむあれどまかすがに時につけたる
ものをすてやらぬはたいともかしこき大御國ぶりのこ、
ろのひろきなりさてうたへらく

み冬つき今は春べとなりぬればきのふもけふもうめの遊しつ
大御政まうさせ給遠のみかどのおほきのもといくばくも
遠からぬほとりに名はいふべくもあらぬ解部めく翁が家
ありそが庭のいとせばきにこちたきばかりうめをうゑた
り白きくねなぬ枝をまじへて盛なる頃友がきのひと／＼
つどひていさけふは心やりうたげせんとてかはらけと
りつよわかたにおふけなきことをもいひ出はてはいその
かみふるごとになむなりぬるそも／＼あをによし奈良の
都にあめのしたまろしめしけん櫻彦のすめらみことの御

橘枝直

代にはうまの爪つくしの大みこともちのかみの家のうめ
 さかりなりけるに此つかさのすけを初て近き國のつかさ
 づかさくすしたちさへまわり合て花のもとにさかみづき
 しつ、心くうたをなんよみける今もさるためしにな
 らひてながきみじかきたくみをまうけず詞をかざらずあ
 りのまにくひなぶりつくりなんとておのが玄、おもほ
 しきさまを云いづまづあるじの翁
 今よりはうめなばうふとて花をこそとへ老をやはとふ
 いとねたくも有かなとくねりいへるも花より氣なるかし
 らの雪につみゆるし玉へとなんまうす

常 樹

おほよそ春に、はへる草木の花はいづれか人の目くはし
 とせざらんいづれか人のをらすおもはざるべきそれが中
 に梅てふ花のみゆきふる冬のきはみに咲いで、霞たつ春
 のはじめにかをりさかゆるは物のいそしくかどあるさま
 に見えてよにもめでたくなむありけるかれおもふにうつ
 そみの世にある人のことわざも瀧津はやせのいはばしる
 なせればかならず時をうしなはずいは垣淵のよどめるこ
 とすゑはつひによろずのわざにまことなし我はおぞく
 にぶきさがありて常の、りにつけてはいふべきこともあ

れどそはまばらくおきてたゞこれが花ならましかばとお
 もひをるにけふしもうめの木のもとのうたげにあひてう
 たへる歌
 春さればまつさくことをあはれてふ園生のうめの花ならましを

久呂奈利

懼邇籛豆爾佐久野巨乃幡那布由基母理異摩八波流辨登佐
 俱夜古能頗奈云昔之歌乎降多流世乃人者百濟乃和爾之詠
 而諫奉例留隨邇言未久毛恐伎大鶴皇太子之節者天津日嗣
 知志米之奴止云且許能花八梅花可爲登毛云多流遠照也
 難波之契冲云併曰良久彼王仁之裔子之史等之中文爾祖乃
 功乎婆悉記而有氣禮杼此歌之事者不言有家里如是貴功之
 有武爾波何如瀧志豆萬四然云毛和爾之歌登爲毛後爾付添
 天云也來止又鳥鳴東在吾賀茂大人者古能花乎梅爾有弊之
 云事乎不取春能來天即開花登耳思閉流波降禮留世人心心
 狹志伎我病爾奈武有只廣久春所開木乃花爾云留古曾古人
 乃意奈奈禮古今六帳云物爾其歌乎毛木乃花之類爾載多留
 爾梅云事假爾毛不見只飛鳥藤原等之宮之御時從序歌爾母
 詠始而有家留波其本唐國從根古自而來乎終爾國毛志美々
 爾薰滿留也來故思爾鳥梅云事毛空見國乃論爾安羅受言佐
 部久國乃隨爾傳禮留可成杼今日者縣主之家之梅山爾集而

人之所書久爾花乎連爾香乎盡志返々萬事者皆盡然有婆
 己何事乎歟爲言登爲良武故此事遠須良記而聊古文乎學友
 等之便登爲閉久也首也然斗薰榮留時山之豆波春乎告去社
 世爾無幾辛配物登可有氣禮依是豆餘迷流
 以曾能柯美不里爾斯散刀爾于賣那俱婆登比久流波流毛居
 受夜阿羅末之

藤原河津宇麻伎

言さやぐから國にはあし引の山もまみ、にさくてふうめ
 が花をそらみつやまとの國にはあしがきの人氣ちかくに
 なむ植生しげにこはいにしへから國よりもて來りし種に
 して伊猛の大神のなし給へる木にあらざればなりまかあ
 りてこそこの御國にめでそめつる事はとぶ鳥の明日香の
 宮のころなどやはじめなりけむそもくあしはらのみづ
 ほのくにはみづくしきこ、ろのとほれる國にして海山
 草木とりけだものまでも心なほくかたちゆたけく人はた
 まかし有ければ大御代は平らけくなんきこしをしたりけ
 るまかるにそのうめてふものは木のだ、すまひくるしげ
 にかままり花のすがたかたくなにやせたりたゞかをりこ
 そよきといへどもみふゆこもれる雪をおかしてひとりに
 ほひ出ぬるは天地の道にたがひてかたましき心とぞいふ

べきこれぞ此よろづにことさやぐ國のてぶりをそなへた
 るものにてかのあすか藤原の宮の御時の人たちから國の
 こ、ろせばくかどある道を學ておきてのふみのこちたか
 りしよりわがすめ神の道の上はをしくひろく下はなほく
 まろき心あることをわすれておみたみながらから國の
 手ぶりにて上はうるはしく下はかたましきことの出きつ
 つかけまくもかしこきすめらみことの大御おほしにそむ
 けることなむ多になりたるこのうめが花もそのからの
 道をまねぶ心ゆめてこしものにして木の大神の御こ、ろ
 にはしもあらずすめらぎの御ためもくるほしかれば根ご
 めにほりもすつべきものにあらずやけふまかしながら花
 またきほどのうたげにあひてさかづきをす、むるよすが
 とのみはなれるてふことを急ひふしながらとなふめるい
 で人はよしやあしやをさだむとも何かいとはん
 この夕春かせ立てうめのはならりにもちらせきかづきの上に

橘ちかけ

うら、かなる春の日をなほもあらず友かきかいつらねて
 朝とりのあき立出てゆふづ、のかゆきかくゆきあし引の
 山路をわけのぼるにえならぬ雪のかをりくるやうめの咲
 たるならんいでたづねずやはあらむとてそこはかとなく

とめ行ばまたきえあへぬ雪のうちにひとつのやどりなむ
 ありける眞木の板戸をすこしおしあけてこてふに似たり
 前のたなはしに去はしたちてうかゞひみるに白栲なるく
 れないなるいとふりたるうめの木を軒ばよりはじめてく
 まもおちずうゑわたしたるが花はなかなばさきたりあるじ
 の翁よろほひ出てひとりのみみるもあたらしかるに都の
 春をしもおきてとひいましけるよとてゐて入ぬやがてか
 はらけとり物かたらひなどするほどに月も出たり翁のい
 へらくそもそも八千ぐさの花はあれどうめてふ花は丈夫
 のまこ、ろににたる花にざりけるをいかにといふに此
 木のありさまこと木よりげにむづかしけなれどその花は
 いとみやびやかにしてやへふりしけるみゆきをしも玄の
 き出其香は千里の外にもかをりいでやますらをの心のう
 ちは人をあはれみ事に、きひて有ものから梓弓たにきり
 もちつるぎたちこ、にとりはきて岩かねのさかしきみね
 をふみ立波のかしこき海をわたりてのちの世にかたりつ
 くべき名を立つるもおなじことわりならずや男山さかゆ
 くひとくはたゞ此梅の花をもて下行水のかゞみとせよ
 となむいひけらくすなはちうたへるうた

春道にとぶらひきませ人と、もにさきぬるうめの花見かであらに

こたへてうたへらく

駒なべてまたこそとほめ雪のうちに咲出る花やますらをのとも
 かくてちりぬともよしなどうたひつゞけてかへりぬ

ふちはらの國満

梓弓はるの月かげうら、かになりまさるにあし引の山の
 霞は朝な／＼立そはり園生のみゆきも日に日に消ゆくめ
 るを谷のうぐひすうつり來てさへづるこそめでたけれそ
 をだに有をあるはかきほも玄ゞにあるは軒端もせきまで
 咲るうめこそはあれこは霜雪のふるとしよりしも色のあ
 らそひて咲はじめたるがにるものなきにはるの梢の雪よ
 りもけに白く清らなるを吹としもなき夕風のかをりわた
 るは玄くものもおぼえずなむかくて此ものは昔へならの
 宮のはじめよりぞ専らにめでつれば太宰のつかさ達のよ
 める歌をとなへそのはじめから國より根こじこしものと
 きけばから歌をしも口すさまれつ、ことゞもかたらふほ
 どにある人おしする宮の御時こそといふをそはすべての
 春の木の花なりとあげつらふもをりにふれたるこ、ろす
 さみなりけりそのとひこたへたることは多なればこ、に
 ははぶきてありぬ心やりをなむうたふこと玄かなり
 としのはに咲とはすれど梅の花いやめつらしくおもはゆるかな

春道

百づたふ八十の花はあれど新玉のとしの内よりしも匂ひ
 はじめてあるはあしがきのまぢかくさけるをめぐらしみ
 あるは夕月夜おぼつかなきかをりをとむるなどははる物
 なくこそおほゆれ玄かはあれどいにしへのことを考るに
 梅てふものはもとよりこの國の花ならずひとの國よりも
 たらしきたりけむたねのひろごれるなりけりそも／＼久
 かたの天の道はいづこも同じかれどあらがねのつちのさ
 まはその國々の手ぶりのわかちなんあるることさやく
 から國は國土もひろく人も多なり咲にほふ梅のごとくす
 ぐれて香ぐばしきとも多かれどうたて小枝がちに入まか
 りてむづかしくるしげなるをまれにみるにおもひまど
 はれめづらしき心にひかれていとまかしこきわがすめら
 御國の人天地の事のまに／＼玄ひすをしへすまつりごち
 玉ひしいにしへを忘れいにつれば上をおかす心さへおこ
 りて世のみだれしものでこしならずやされど百とせまり
 此かたとりがなく東の大城に大政申給ひしより四方の國
 國ともひゞきたち八島の外までも玄ら波音きこえずな
 りにしかばまことに香ぐばしきにはひもこちたきに過す
 さき出るいろもくるほしきにいたらぬがごどくあを人く

さほか、る御代の大まつりごとをよろこび此時の春にあ
 ふをなむたのしみけるかれをりにつけつ、ふるき歌をも
 によひあらたなるをながめ出ぬるをうめこそ花てふはな
 の始なればとてまづこそうたふめれそのうたにいへらく
 うらなびく春の園生のうめの花さきのさかりに夕かぜそふく
 まさとも

若草のにひしきとしとなりにてはさえかへる雪あらしも
 ふかす山のすゑ野にかげろふのたつめるは心あこからす
 神になむありける友達ふたりみたりかいつらねてそこは
 かとなくかすみをわけ行ほどにたもとくんだりいさ、か
 うごきて吹くる風のかをれるがえならぬにくらぶの山も
 などいひつ、とめ行めり誰その人かすみふるしたりけむ
 野邊ちかきさ、竹のかきねもまばらなるは朝な／＼うぐ
 ひすのみやかれずとふらんいともしふりにたる梅の木
 だちのかたくなにかゞまりたるが咲出ぬるはほこりさま
 にさかえたらんよりはなかく／＼に見所ある心地なむしけ
 る人しれぬやぶはらにたちて世にふりぬれど時をわすれ
 す雪をおかしてにほひ出にけんもめでたくまたなきかを
 りのあやしの手もとをいとはすわれもむかしはなごく
 ねりおもふてもあらぬ花の山の高きよ鶯のおもはんこ、

ろも人こそやさしけれ老たるとちいひしらひつ、ぬびる
うはぎなどつみはやしかはらけめぐらせるもほどなくお
ぼゆる月ならねど山のはにげてよてふ古ごとをもひとり
ごたれてなほあかねばなむ

人ヤリのみちならなくに梅の花かゝれる野邊によよれてまし

橋三園

久かたの月かげうらくとにはひものさはに大城の松の
雪も消にたれば朝あけのとりもおもしろくさへづり夕べ
の風もどかになりわたりけるまかあればほどなき庭の
うめもさかりにさきさかえて峰の雪の色をうばひたかき
あたりのかをりをひけりまかしも告なくにこてふに似た
る風の便りやまのかりけんうとからぬ人こそ來たりつど
ひにけれあるはも、もどりの聲のこほしきなどによひ出
たるはゑひなきもしつべくおほゆすがのねの長き日も木
の間がくりてまそかゝみむかひける人すらあればたれと
きのあやなきまでまどひまつ、なほしもをしみあへりけ
り

うめの花さけるあたりはねば玉のよるもなげらのかかりとかおもふ

長歌短歌

佐知男

美布山津貴波流佐里久禮婆毛々知杼理知杼理褒奈伎奴夜

知俱左能久佐貴母毛延奴阿羅多麻乃不留登志加氣豆佐岐
伊泥久頼宇米登婦波那波屋麻加是波與奈々々婦計杼師良
山記波比爾氣二不連勝伊麻波之毛四多爾可與倍留阿米都
知能波流乃許己呂遠以加泥可聞未太伎爾思理豆比登里能
美嘉乎利曾武羅牟可久之母曾多倍豆志佐氣婆佐久波那波
登吉自可良那武加遠留可母登古爾安羅奈武迷毛加禮受阿
左山婦美禮杼免都良之幾加母

反歌

和加夜杼能宇米佐加利奈理志呂多倍乃曾泥婦利波倍豆登
不比登毛我聞

小野古道

久かたのあまざらひふる雪の中にかをれる花はそれとし
も見えこそわかぬかみつえは雪かあらぬかなかつえにき
ぬるうぐひすなれこそはわかばわきなめ霞たつ春し來ぬ
れば花とのみきのふまで見し雪消て雪と見るまで梅ぞさ
きける

白ゆきのふりにしとしゆ春かけてみれどもあかねはなはこの花

村田春海

あし引の峰にも尾にもうらくとかすみ棚引うちなびく
はるさりくればうめの花木すゑをまげみ冬の日にふる雪

のごと秋のよにてる月のごと我その、さきさかりは見
れどあかねかも

宇米尾興免流

平春苑

多麻暮古之美知山伎夫里爾烏梅賀迦乎麻蘇傳爾登米天遊
久波多賀許叙

原能矩

うちわたす遠かた野へのうめの花何ぞとへばかせかゝるなり

藤原秀信

五十年あまり春はへぬれど我やどのうめはいるかもかはらざりけり

きむやす

さほ願のかすみの衣かゝるまでうめのさかりに春風ぞふく

茂樹

春來婆梅咲庭爾立奈連奴可遠留袂乎人那止賀米曾

藤原能載

冬隠開哉曾乃布能鳥梅之花加乎理俗萬佐流春能日每爾

きさららきの中つころひとく縣主の園なるうめが下
に集て心におもふことをふみにのべ長歌みじかうたな
んどにもよめるついでにおのれはたよめと有けるをか
たはらいたくなん思ひていなめどもみなひとのゆるさ
ぬをわびにて

常座

ひさき生るかた山かげの里人もはるやまらむにほふうめが、
雪ふかみ冬こもりせしかすがの、おどろも草も春をまゐるかな

初春

上

子日

千

國

つなやす

春かぜにかゝる軒端のうめの花かつりゆくもなへてかなしも
上つふさの國にいきたりけるにむかし名さゝる人の住
たりける所ときくにあやしの賤のふせ屋とものみある
がいととしふりたるうめのさきてたてるを見てよめ
る

恭章

あしがきのふりぬる里のうめの花むかしおぼえて香に匂ひけり
家に入りけるうめの花を人の見にまうできて侍けるに
日くれてかへらむといひければよみ侍る

橘慶明

暮ぬとて何かへるらむうめの花にはふ木かげに寝なましものを
わが袖にうつして行むうめのかを花のあるじはよしをしむとも

橘千國

ひさき生るかた山かげの里人もはるやまらむにほふうめが、

麻苦登

雪ふかみ冬こもりせしかすがの、おどろも草も春をまゐるかな

常座

ひさき生るかた山かげの里人もはるやまらむにほふうめが、

初春

雪ふかみ冬こもりせしかすがの、おどろも草も春をまゐるかな

はつ春の初子の時ふにあふことに引や小まつの色もかはらず	かすみ行春の心にたなびかれきのふもけふも野邊にくらしつ
若菜	春駒
春かけてかしろの雪はつしるともうらわかきなをつまんとぞ思	はる草やみどりそふらむ風はやのこがねが原に駒いばゆなり
霞	春雨
うちなびく春し來ぬればさころものをつくば山に霞たなびく	はれもせずふるともわかす霞つゝ花をよほすはる雨のそら
春風	同
朝付日むかふの山にたつかすみみだれもはてぬ春かぜぞふく	はるさめはふるとしもなくかすみつゝ柳のいとをたふふらつゆ
雪のこれり	春月
若くさの下もえいづる春の野にこゝろながくものこるまら雪	とひ行はいもがかなすことの音のおぼるに霞む春のよのつき
鶯	さくら
山里に住ばこそきけ谷の戸をいでながらなくうぐひすのこゑ	春日野の霞しいまだわけなくに春はなかげになりけらし
柳	同
庭の面にうゑし柳のいとながき春の日にあかされるらむ	二月の朝氣のかぜは寒けれどそらのにほひはにるときぞなき
若草	初午
うらくと春日のてれる高まどの野へばまづこそみどりそひけれ	けふといへばいなりの山の杉むらにかざしをりけり花ならなくに
同	石清水臨時祭
さしあらふ涙もまづけき春くればむらくもゆるいそのわかき	宮人のかりかざすめるさゝ竹のよゝにたえせぬけふのつかひか
わらび	さくら
さわらびのもゆる春日に成ぬればおどろか申しひとぞわけける	山ざくらさきともさける盛には霞もえこそへだてざりけれ
野遊	雲雀
茂	うらの
樹	

春の野のかすめる空のなちこちにそれとも見えすひばり鳴なり	常陸には田をこそつくれ行春をまめ引はへて誰かとむむる
雉子	宇麻伎
わか草のつまこふらしも野つとりの雉子鳴なりたかはらの上に	
歸雁	きよせ
春の色はいつこのさともかはらしをこゝなばかりとおもひてかゆく	
彌生	常
梅のはなにほふやよひは春の雪のとけきことのかぎりなりけり	
呼子鳥	高
まだまらぬ山路をひとりわが行ばよぶ鳥こそたのまれにけれ	
蛙	黒
ふめはへて小たねまかする小山田の夕かたまけて蛙なくなり	
すみれ	古
わかなつむ袖にさえつる春かぜはすみれ咲ころぞのどけかりける	
藤	俊
すがの根の長き春日のひかすにもあまりあるべくみゆる藤なみ	
苗代	伎
おほみとし八束のみ穂とまもりませ水口まつる見くまりのかみ	
苗代	さゆり子
せきかゝるなほしる水もゆたかにてたのみおほかるまつが小山田	
春のはて	真
	淵
うめあはせ	うめあはせ終

拜啓益御清穆奉賀上候 弊館義年來特別の御眷顧を蒙り日に月に業務繁榮致候段深く奉感謝處に御座候然るに拙者義從來國民軍に編入相成居候處先般徵兵令改正の結果後備陸軍歩兵中尉の軍籍に相加り既に召集の大命に接し候に付何時出征致し候哉も計り難き場合に御座候固より拙者出征致候とも營業上毫も差支無之事には候へども是迄の御愛顧に對し確實なる上にも確實を旨と致度存慮にて今回親戚相會して合資會社に組織し商號を合資會社吉川弘文館と稱し拙者の外山田順一相澤敏太郎林縫之助の三名を無限責任社員に舉げ弊館從來の權利義務は悉皆繼續致候のみならず更に一層の擴張を期し精確敏速に營業致候覺悟に御座候間何卒倍舊の御光顧を垂れ給はんことを伏して冀上候右御披露旁御挨拶申上度如此候草々拜具

明治卅七年十一月四日

弘文館主 吉川半七

拜啓益御清福奉大賀候前文吉川半七より得貴意候通り半七義何時出征の命令に接し候哉も難斗候に付親族一同協議の上合資會社に組織致し微力ながら出版界に相盡し年來の御眷顧に報い奉り度所存に御座候間何卒相變らず御引立被下候様奉希上候時下寒冷御自重奉祈候草々拜具

東京市京橋區南傳馬町一丁目

合資會社吉川弘文館

社員一同

明治卅七年十一月四日

明治三十七年十二月十五日印刷
明治三十七年十二月十八日發行

(賀茂真淵全集第四)

編輯者 國學院編輯部

校訂者 賀茂百樹

發行者 合資社 吉川弘文館

東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地

代表者 吉川半七

印刷者 野村宗十郎

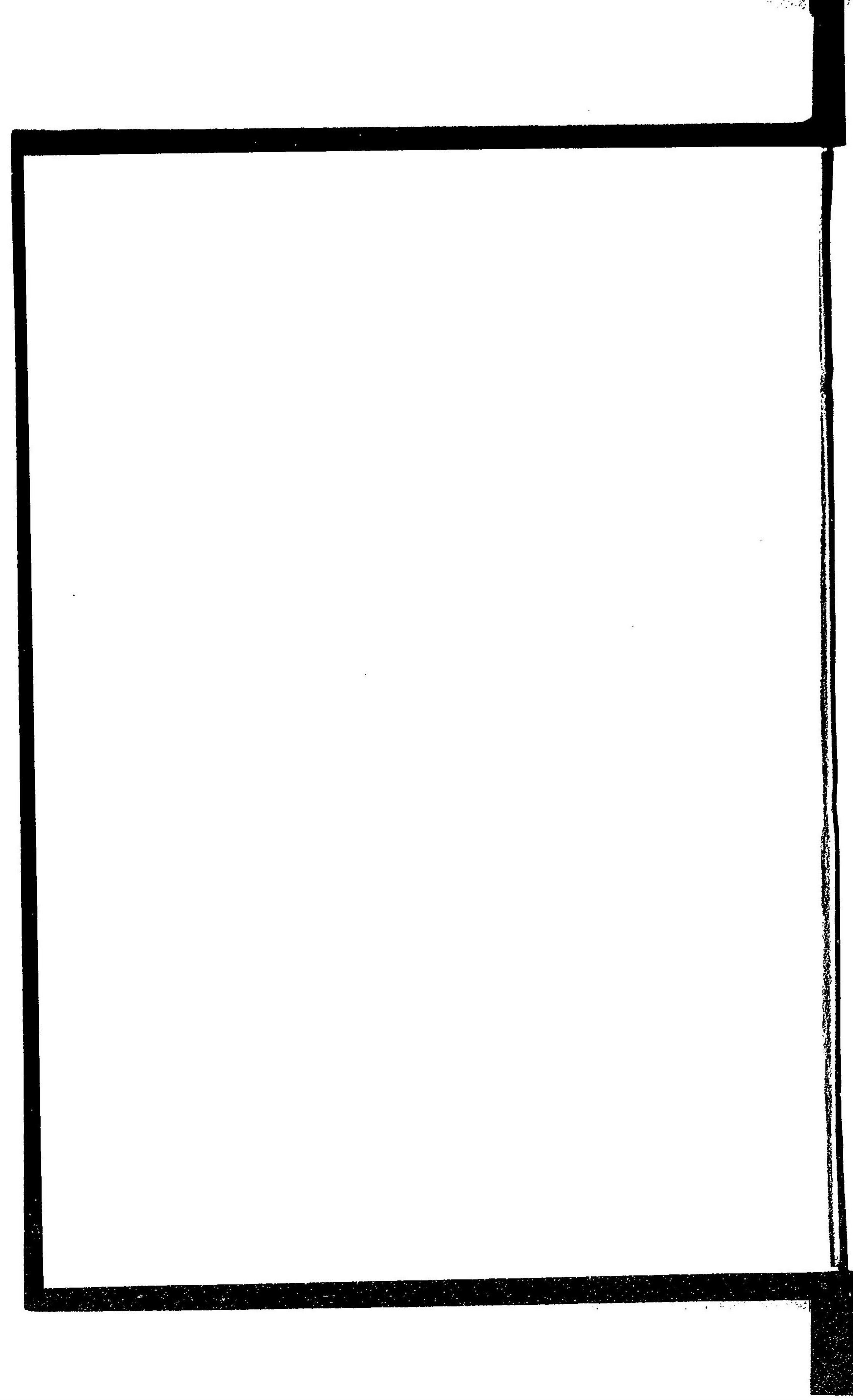
東京市京橋區築地叁丁目拾五番地

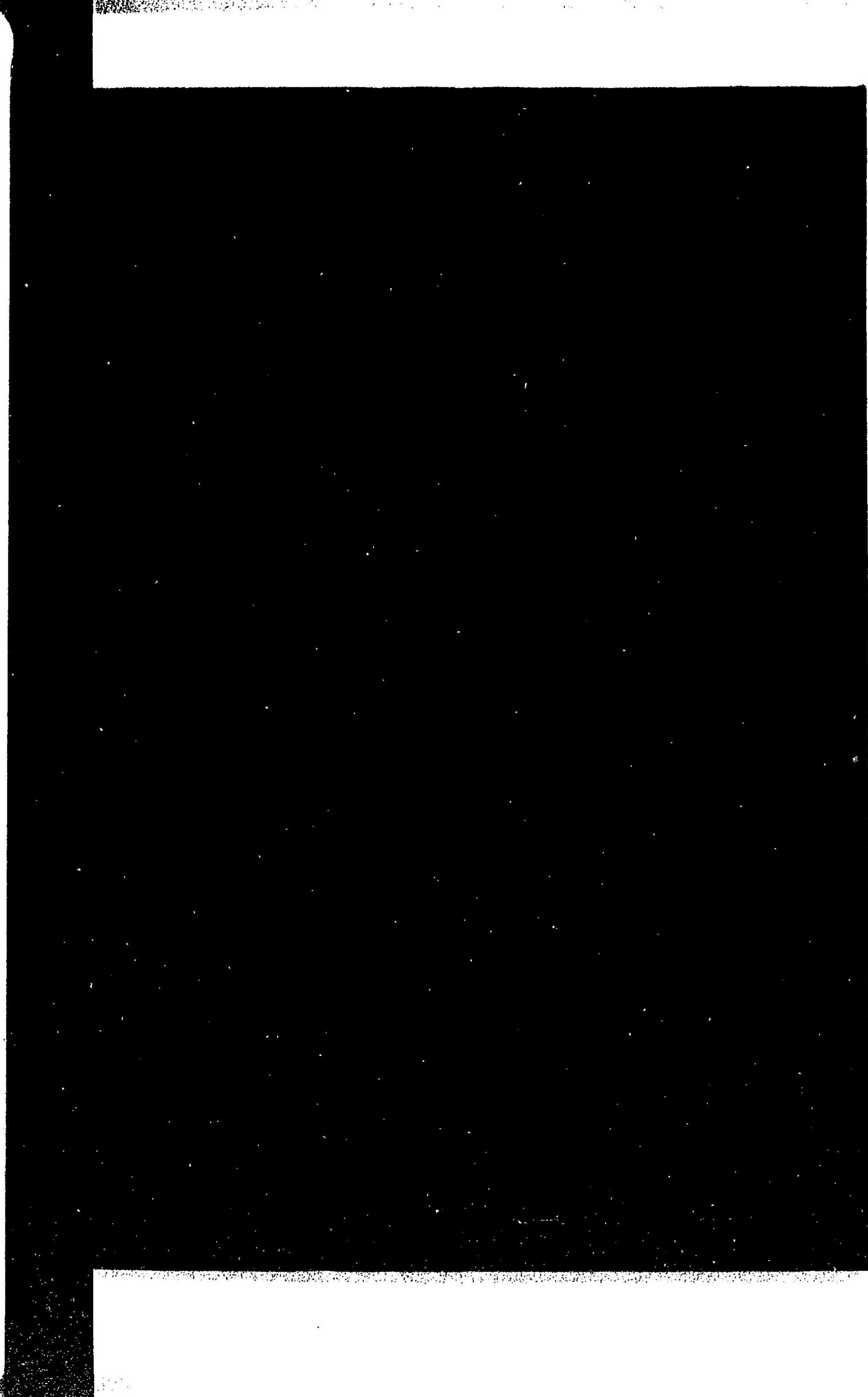
發行所 合資社 吉川弘文館

東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地

著作權所有

21711





121.24
R
KK

008923-005-6

121.24-kKK

賀茂真淵全集

国学院編輯部/編

M36-39

AAD-0025

